イリヤの豪雨に銃を撃て

Shoot a gun in the ILYA night.

武器スレインパラレル

R-18

目次

イリヤの豪雨に銃を撃て 3
トカレフとペカー 43
Deep・Green 53
妖刀を抱く 71
Sword of blood 87
Arms of a pirate 103
あとがき 180

イリヤの豪雨に銃を撃て

孤児伊奈帆×武器スレイン

二人分【18×19】
AK74【12×16】
見えない傷【14×16】
壊れる前に【15×16-17-18-19】
その手で壊して【20×19】
摩天楼【35×19】
初恋。雨の温度。硝煙の臭い【50×19】
シロツメクサ【8×16】

Rifle

二人分

伊奈帆（18）×スレイン（19）

「準備オーケー」
『こっちも』
「調子は？」
『上々さ』
伊奈帆は小さく口笛を吹いた。汽笛めいた呼吸音は夜の風に掻き消える。
「一発で仕留めよう」
『お前次第だな』
「外すわけない」
『くっちゃべってないで、集中しろ』
指に手応え。
肩に衝撃。
耳に残る風切り音。
見えるはずもない、銀の弾道。
暗視スコープ越しに見える、時を止めた生命。

小さく、息を吐く。
「終わった」
『…仕事が早い』
伊奈帆は手際よく荷物を纏め、武器を担いでビルの屋上にワイヤーを固定した。伸びた先は数十階下、外階段の踊り場。ベルトの金具を引っ掻ける。柵を飛び越えた。
「褒めてくれてるの？珍しい」
スレイン、と呼ぶと、銃が物を言うのが分かった。
『…たまにはな』
ライフルの銃床をひと撫でして、伊奈帆は壁を蹴った。シュルルルル、という摩擦音と共に、空がどんどん遠くなる。髪を逆立て伊奈帆は思った。
足から地面に落ちていくのは、曲芸みたいで面白い。

初めて人を殺したのは、雨の日だった。
生まれ育った町は戦争の爪痕が大きく残るスラム街。
八歳だった伊奈帆は、走っていた。
誰も、雨の中傘も差さずに走りたいなんて思わないだろう。伊奈帆もそうだ。彼にはもちろん、理由も事情もあった。逃げていたのだ。

子どもだから。
売るなら若い方がいい。生きたまま奴隷にしてもいいし、ばらばらにしてもいい。パーツに分けた方が、高値で売れることも多いのだ。
生きたまま、腹を裂かれて内臓を一つ一つ抉り出される恐怖。身動きもできず搾取され続けるだけの未来。
自分を襲おうとする、未来なんて呼ぶには吐き気がする「その後」から逃げていた。
抵抗すれば、あっさり殺される。レイプされて、あちこち切り落とされて、襤褸のように道の真ん中に転がる。
フラッシュバックする、黒い雨。
裸。
閉じない瞼。
口からだらりと垂れた舌。
指が全部折れていて。
散らかった、泥に塗れた黒い髪。
…一本だって、持ってくることはできなかった。
伊奈帆は、声を殺して走った。
世界のひび割れのような、狭い路地裏に滑り込んだ。何かに引っかかって転ぶ。
「いって…」

足元には、雨に濡れて光る自動小銃が転がっていた。
迷わず手に取る。頭蓋に響く声。
『助けてやる。トリガーを引け』
それが出会い。

狭いアパートの壊れかけた扉を蹴飛ばす。鍵はない。どうせガラクタばっかりで、盗っていく物なんて新鮮な卵くらいしかないんだ。そういや、あと三個だ。明日買いに行こう。
『先に拭いてくれ』
風呂場に直行しようとすると、スレインが肩の上で言った。
「たまにはさ、人型で先にお風呂っていう選択肢ないの？」
どうせ二人とも埃と煤で汚れているんだから、風呂で流してもいいと思うんだけど。ここ数年、一緒にお風呂なんて入ってないし。
二人の間で時々行き来する会話だった。スレインが眉根を寄せてこれまで何度も言ったのは、風呂に入る前に銃の汚れを落とさないと、あちこち汚してしまうから。スレインはこれまでと長さも強さも同じため息を繰り返し言う。
『狭いし汚れる。あと、お前の目つきがなんか嫌だ』

怒らせてしまったみたいだ。そんな、いやらしい目で見ていたかな。少しだけ反省する。

荷物を全部担いだまま、蛇口を捻り、湯を溜める。バスルームを出て、薄汚れたタオルケットを敷いた床に手順を守って置いていく。まず、スレイン。次に、暗視装置。レーザー測量機と携帯端末が入ったドラッグバッグ。最後に、タクティカルベストの胸ポケットから使ったことのない予備の弾倉。これを使う日が来たら、きっと使う前に死んでしまう。お守りのように持っていくのは一応、生きる意志くらいはあるから。

ウエスで銃身を丹念に拭く。光沢が戻り、なんとなくだけど、サッパリと気持ち良さそうな顔に見える。武器の顔がどこなのかは、分からないが。

人を殺した後、ブラインドが下がった薄暗い部屋で銃を磨く。割と荒んだ状況だけれど、嫌いじゃない。湯船の水音を少し遠くに聞きながら、スレインと無言で過ごすこの時間。

世界がこの部屋だけになったみたいで、とても安心する。

シャワーの水音が、壁を隔ててキッチンに届く。

パカ、パカ、パカ、と三つの黄身を割り解す。伊奈帆は砂糖三杯と目分量のめんつゆを入れて、ボウルを傾けて掻き混ぜた。とろりとして、いい感じだ。

フライパンの上で菜箸を振ると、じゅっ、と音がした。
これは、命のメンテナンスになるのかな。
心がある武器は、人間らしい暮らしをする事で長持ちする。逆に、乱雑に扱われればすぐ駄目になる。
どのような扱いを受けたかは、武器の人型年齢に現れる。
スレインと出会った時、僕は八歳だった。雨の中、並んで立ったスレインの人型は僕より頭一つ分背が高くて、見下ろす顔はいなくなった姉よりも年上に見えた。人間の年齢で言うと、十六歳くらいだったと思う。でもそのうち、彼が作られたのは僕が生まれる一年くらい前だと知った。要するに、九年間で十六年分の命を消耗させたということ。酷い目に遭った、と言っていた。今でも彼の体には酷い傷や凹みが残っているし、装填が上手くいかない時がある。以前無茶苦茶されて、体が受け付けないのだと。それでも近頃は、随分沢山弾を入れられるようになった。古傷だらけの銃身も、手に馴染んで柔らかな感触だ。
あの日。雨と血と硝煙の中、固くなった指を一本一本引き金から外した。血溜まりに落ちた武器は、発光して形を変える。現れたのは、人のかたち。
あの時僕の体は八歳。スレインは十六歳。今は、ほとんど同じくらい。もうすぐ追い越す。彼の背丈も、年齢も。

「いい匂い」

人型でタオルを肩からぶら下げたスレインが、顔を綻ばせて近づいてきた。

こんな食事、武器には必要ないのかもしれない。ガンオイルの手入れだけで、半永久的に形と生命を保つ。理論的には。

けれど、人間と同じものを食べられるように出来ていて、食べると美味しく感じて、人のかたちが美しく満たされるのは。武器の温度が、どこか優しく手を伝うのは。

きっと、作り手の愛だろう。そして願い。大事に使ってもらえるように。僕には、その作戦は大成功に思える。

「スクランブルエッグと出汁巻き卵、どっちが良かったかな」

スレインは、顎に手を当て三秒くらい上を見た。薄汚れた天井しかないが、彼が見るとつい追ってしまう。

「スクランブルエッグかな」

「残念、今日は出汁巻き卵」

テーブルに、二つの皿を置く。スレインが床のクッションに胡坐をかいて、なあ、と口を開いた。

「どうしていつも、料理が出来上がってから聞くんだ？」

どっちが良かった、って。
「だってさ」
伊奈帆も床に腰を下ろす。スレインの前に彼用の箸を置いた。自分のは、右手に。両手の親指と人差し指の付け根で、揃えた箸を挟む。彼も真似をした。両手の五本の指が、ぴったりと重なる。一緒にご飯を食べる人が変わっても、この質問を続けるのは。二人が一人と一挺になってからも、律義に守るこの習慣は。
黙祷のようなものかもしれない。
「当たっていたら、嬉しいから」
食べたいものが一緒ってのは、家族のような感じがする。

「「いただきます」」

AK74

伊奈帆（12）×スレイン（16）

思わぬタイミングで、トリガーの手応えが消え、木製の銃床が肩から浮いた。伊奈帆は柄にもなく頓狂な声を上げてしまった。
「弾切れ？まじで？」
『まじだ』
両手で掴んだライフルが返答した。やばい。急いで立ち上がり、相棒を担ぎ上げる。
対面のビルから、赤いレーザーが伸びてジャケットの裾を掠めた。
「朝食べたろ？」
『吐いた』
思い切り舌が鳴った。屋上の錆びた扉を蹴っ飛ばす。
くっそ。お前、それなぁ！
「言ってよ、それ！」
『…そうする』
転がるように、伊奈帆は高層ビルの階段を駆け下りる。

「重い。形変えて」
『ああ…』
地上までまだ遠いが、ひとまず撒いたしもう限界だ。担いでいた荷物を肩から下ろしてそう言うと、アサルトライフルは青白い光を放った。光が収まるとそこには細身の青年が一人。
「スレイン」
先ほどまでスタイルのいい自動小銃の姿をしていた彼は、手足から黒々としたオイルを滴らせ頭垂れた。
「すまなかった。今回は全面的に僕が悪い」
全く。言葉もないが、彼を責めても仕方がない。装填に難ありなのは知っていたんだから。
生きてるし。そう思うと、気が済んだ。伊奈帆は立ち上がり、ズボンの埃を両手で払う。
「歩ける？」
スレインはきっと眦を上げた。碧の双眸が輝いた。武器にしては、綺麗すぎるな。その光。
「壊れてない。歩ける」
一度よろけて、黒い油が壁に手形を押した。その手を握る。ぬるぬるして、変な感じ。

「帰ったら、オイルを挿そう」
手を引くと、諦めたような声が後ろから聞こえた。
「…先に、拭いてくれ」

見えない傷

伊奈帆(14)×スレイン(16)

ざり、と指に引っ掛かった。
手の中のライフル。銃身に、この間までは無かった微かな凹み。こんな所に、傷なんてあったっけ。

「傷、どうしたの」
夕食の席で伊奈帆は聞いた。
「……ああ」
人型になったスレインは、不味いものを口に入れたような顔になり、持っていた茶碗と箸を置いた。床の上のクッションに座り直し、月色の髪が揺れた。
「その…昨日の」
さっと背中が冷える。離されて、別の部屋に持っていかれた。点検とか改造とか、子ども騙しをいけしゃあしゃあと。自分たちのちゃちな欲求を満たしたいだけ。扉の向こうで何をしているのかくらい、知っている。でも、いつも何もできない。
これまで何度、同じようなことがあったか分からない。人の形は、それほど酷くは見

えなかったのに。
「…傷が付くほどだったんだ」
「…あいつら、しつこいから」
武器に欲情するなんて、おかしな話だ。確かに、人に見える。体温もある。ご飯も食べるし、眠ると夢を見るらしい。
でも、人が人を殺すために作った武器を犯すなんて。馬鹿みたいに思える。少なくとも、今の僕には。
武器は武器だし、人は人だ。人は武器を、大事に扱わなくてはいけないと思う。
彼は、僕の命を守る武器なのだから。
そんなことを言うと、またお子様だって言われてしまうかな。
「…伊奈帆」
眠り込んだ僕の頭を、スレインが撫でた。
「…傷は残るけど、平気です」
見上げた顔は笑っていて、髪からシャンプーのいい匂いがした。
「また、子ども扱いして」
てを退けると、スレインはくすりと笑った。
「早く、大人になるんですね」
自分だって、子どものくせに。

壊れる前に

伊奈帆(15)×スレイン(16-17-18-19)

「…痛むのか？」

洗面所で突っ立ったままの僕に、スレインが聞いた。左目に触れていた手でタオルを取り、顔の水分を拭う。

「少し。今日は雨だから」

部屋の中央、正方形のローテーブルには湯気の立つマグカップが二つ。ほろ苦い香りを吸い込むと、気分が少し良くなった。

「ありがとう。砂糖入れた？」

「三杯」

スレインが淹れてくれたコーヒーを口に運ぶ。好きな味より濃くて苦い。けれど、一口、二口。三口も飲むとそんなこと、どうでも良くなった。

ざあざあと重なる雨の音。薄い窓ガラスを雨粒が伝う。空気は少し湿って酸っぱい。

「…伊奈帆」

腰を下ろした、九十度で接する二辺。斜め横にあるスレインの顔を見る。また、年を

取ったみたいだ。ほんの数か月まで、一つくらいしか違わないように見えたのに。
「…僕は、君と一緒にいないほうがいいと思う」
唇を噛みしめて、机の上の右手が痛々しく握り締められる。俯いたせいで髪が垂れ、彼の目がよく見えない。でもきっと、涙は一滴も滲んではいないだろう。
「どうして？」
「僕は武器だ」
「知ってるよ」
「自分の意志で、弾を打つことはできない」
「うん」
「だから…」

カチ、カチ、カチ。
ザア、ザア、ザア。
ギィ、ギ、ギ。

伊奈帆はスレインの言葉を待つ。
何度も開きそうになって、その度閉じて曲がる唇を見る。
耳の中がうるさい。

時計って、こんなに大きく動いたか。
雨は、こんなに悲愴に降るのだったか。
この部屋の、崩れ落ちそうな悲鳴はいつからしていたのだろうか。
「…伊奈帆」
「何？スレイン」
顔を上げて、碧の双眸が僕を映した。人には宿らない光。照準を狙う武器の瞳。揺れることなく、真っ直ぐ向けられる感情。
頬が薄くなり、首の筋が浮き出る。手首の関節が影を濃くする。
ああ、また。また、遠くなる。離れてしまう。
少し伸びた髪が、美しい瞳にかかる。
「僕はきっと、君を殺してしまう。次は、きっと外せない」
それを言うと、スレインはまた俯いてしまった。伊奈帆はスレインの姿を右目でじっと見て、閉じた左目に指で触れて言葉を探す。
三ヶ月前。
この左目を、スレインが貫いた。
孤児と武器が出会って七年。僕は十五歳になっていた。人を殺すことで生き延び、生

きる糧を得ていた。身を守ることから始まった殺しは、自分とは無関係な人間から、これも無関係の誰かに対する殺意の引き渡しへと変化した。スレインは生きた武器だったから、小さな子どもだった僕が一人で生きていくための面倒事の一部をかなり助けてくれた。彼は大人とは言えないまでも、子どもではない姿をしていたから。

二人で過ごすようになり、スレインの人型は時を止めたようだった。初めて会った十六歳のまま、時々はメンテナンスに音を上げつつ、人の悪意に眉を顰めつつ、僕にトリガーを任せて標的に弾を撃ち込んだ。この生活は、上手くいっているように思えた。

そして三ヶ月前。

この時のことを思い返すと、今でも頭が沸騰する。自分を詰る言葉が次々脳髄を奔る。時が戻せるなら、絶対に今度はあんなことにはならないと誓える。

要するに、僕はしくじったのだ。

油断も慢心もない。準備も万全だった。でも、僕は自分を許せない。

思ってもみなかったのだ。

スレインを手から離すなんてこと。

あの夜。星のない夜だった。暗くて寒い夜。エレベーターの壊れた廃ビルの屋上。伏せた姿勢で、標的を狙う。トリガーは冷えていた。黒く固いターゲットスコープを覗く。

はっきり見える標的。無言で弾丸を撃ち込んだ。
後頭部に衝撃。
前に倒れる。
地面との衝撃。
手から離れ、
奪われる武器。
立ち上がろうと手をつき、振り返る。
一発の銃声。
気が付いたら、病室だった。

「自分のせいだと、思ってる？」
スレインは俯いたまま頷いた。伊奈帆はしばらく彼の丸まった背筋を眺め、机の上の冷め切ったコーヒーを見遣った。真っ黒な液体。きっともう、苦くて不味くて飲めたものじゃないだろう。そう思いつつ、マグを持ち上げ中身を煽る。
ごくごくと、喉の奥に放り込む。刺激を受けた胃がきりきりと痛む。
口の中の苦さと甘さ。比率は、苦さが圧倒的だ。空の容器の底。溶け残った砂糖と薄く残る液体の色から目を離す。

「…コーヒーは好き？」
「…は？」
怪訝な顔を向けるスレインに、伊奈帆は笑いかけようと口角を上げた。ちょっと引き攣ってしまったけれど、なかなか上手くいったと思う。スレインが一度ゆっくり瞬きをした。
「本当言うと、僕はコーヒーなんて嫌いなんだ」
スレインはじっと眉を寄せて聞いている。一度、伊奈帆の前に置かれた空のマグカップに視線を動かした。
「でも、スレインが淹れてくれるコーヒーは飲めるし、美味しい」
正直、ちょっと濃すぎるんだけど。でも、美味しいと思う。
「君がいなくなったら、僕はコーヒーを飲まなくなるだろうな」
「…伊奈帆？」
何が言いたいのか分からない、と顔に書いてスレインは首を傾げた。伊奈帆は自分の後頭部をがりがりと掻いて、鼻から息を漏らす。
「まだ、封を切ったばかりだから。コーヒーの」
こんな言い方しかできないけれど。もっと上手に伝えられるように、すぐに大人になるから。すぐに追いつくから。だから。
「それがなくなるまでは、一緒にいてよ」

スレインがぱちぱちと瞬きを繰り返した。
「…分かった」
泣き笑いのような微笑み。開いた身長と年の差は気に入らないけれど、こういう大人ぶった表情は嫌いじゃない。
スレインは並々と残ったコーヒーを一気飲みし、口を曲げて眉を寄せた。
「…不味くないか？　お前、よくこんなの飲んだな。苦いの嫌いなのに」
「…ご飯にしよう」
伊奈帆は空になったカップを両手に持って立ち上がった。
よく飲んだな、なんて。全く、肝心なところで鈍いんだから。
「君が好きだからだよ」
「何か言ったか？」
「別に」

キッチンの流しから見える細い体。さっきの笑顔と顰め面。良かった。これが現実で。今日は何か、食べられるといいけれど。

昨日。やっと取り戻した。

掴んだ煤の凝りついた銃身の感触と、血で濡れるトリガー。死体に囲まれた暗い部屋の中。生き残ったのは一人と一挺。人型の泣き顔と、しゃくり上げて言葉にならない声。傷がついて、少し伸びた痩身。抱いた肩が震えて、繰り返される謝罪と。

『壊して』

…もう、あんなのはごめんだ。二度とこの手は離さない。

その手で壊して

伊奈帆(20)×スレイン(19)

押し倒すと、床に頭部がぶつかった。鈍い音。しかし脳震盪を起こすことも、意識を失うこともない。彼の作りは人間を模しているが人間ではない。火薬を飲み込みオイルを循環させる生きた武器なのだから。しかし、痛いはずだ。平気な風を装っているが、こめかみのあたりが痛みでぴくりと痙攣した。

「もう子どもじゃない」

僕が言うと、スレインは靴を片方無くした子どものような顔で口を引き結んだ。壊れかけのシーリングファンが軋む音と、床に落ちて散らばった銃弾の転がり跳ねて壁を打つ音。抑えた呼吸は荒く速い。額から流れた汗が一つ、顎から滴りスレインの頬に落ちた。

コンクリートの床上、ブルーシートの上に仰向けの武器と馬乗りになった持ち主と。

「伊奈帆…」

泣きそうな声。心がある。命がある。それをどうして分かってくれない。

『壊して』

何回目だろう。彼の懇願は。何度目だろう。僕がそれを拒むのは。
「もう、お前は一人で生きていける。僕の身体はもうだめだ。ガタが来ている。お前の足手まといにはなりたくない」
あの時みたいに。
スレインの指が僕のこめかみに触れ、銃創をなぞる。そして、壊してくれとそう言った。
ふざけるな。
「あの日。あの雨の中、君は僕に言った。助けてやるって」
死んでいた。きっと。いや、必然に。僕は子どもで、一人ぼっちで、何も持っていなかった。路地裏で転んだ僕の足元に転がっていた雨に洗われ黒く光る自動小銃。それがスレイン。
『助けてやる。トリガーを引け』
僕は君を持ち上げた。重くてよろけて、泥濘に足を取られた。遊底を肩に。抱えると言うよりしがみつくように、僕は君を構え、君は言った。セーフティー、トリガー。引きつけて、そして額を打ち抜けと。がたがた震える僕の指に伝わるのは、鋼鉄と雨の温

度だけではなかった。
「君は、僕を助けてくれた。命を救ってくれた。だからこうして、僕は大人になることができた」
スレインは馬鹿だ。あの時、もうボロボロで、壊れかけていたくせに。僕が蹴つまずくまで、意識も失い雨に倒れていたくせに。銃弾を飲み込むたび、中は軋んで削れて、やっとの思いで打ち出した癖に。それに気づくには、出会ったばかりの僕は子どもすぎて。大切にしたいと思った時には、君は攫われ僕の左目を撃ち抜いた。
そのことで、君はまた年を取った。僕は早く大人になりたくて、早く君に近づきたくて
早く君を守れるくらい、強くなりたかったんだ。
「君を壊したくない」
武器だなんて、思えない。もう。僕は自分の命を守るために彼の命を削ることに耐えられない。君が救ってくれた命で、君の傍にいたいんだ。
「もう、君は武器じゃなくていい」
スレインは目を見開き、口を二度開閉させ、しかし何も言わずに唇を噛み締めた。
「一緒に生きよう。人として」
「できない」
スレインが激しく首を振った。押さえつけた手首が抵抗した。抵抗とも呼べぬ微力で。

「分かってくれなくてもいい。いや、分からないでいて欲しい。僕は武器だ。人殺しの道具だ。お前と同じじゃない。人間じゃない」
伊奈帆はスレインの眦に唇を寄せた。透明な、人と同じ色の液体を舐め取る。
「物なら、どうして涙を流すのさ」
瞬きをして、また流れ落ちた。それを掬う。睫毛は濡れて束になり、その生え際や震える瞼の皮膚に透ける蒼白い静脈はこの上なく命そのものだった。
「オイル漏れだ」
「しょっぱいオイルだね」
涙を流す武器なんて。なんてちぐはぐで、そして愛おしいんだろう。
「半分は機械だ。でも、半分は命だ」
僕は誰より知っている。武器のスレインを。
「僕もそうだ。半分は人だけど、もう半分は人じゃない」
涙を流す武器は、涙の枯れた人よりずっと人らしい。白い頬が二人分の涙で濡れた。
「もう、何人殺したかなんて分からない。こんなに人を殺して、人だと言えるわけがない。化け物だ。でも、聞いて。これは確かな事実だ」
吐く息と吸う息を交換できるくらい近く。睫毛が触れ合うほど近く。額が触れて温度

が均されるくらい近くで見つめる。涙に濡れたその瞳を。そして言う。
「君が殺した数と、僕が殺した数は同じだ」
「…ぁ、ぅっ…ん、ん！」
何か言おうと震えた口を口で塞ぐ。手と足が抵抗し、喉が反り腔内では舌が引っ込む。舌を舌で捕まえて、手指に指を絡ませる。逃げられないように。ここにいるように。鉄錆の味がする。これは血だ。どちらの血だろう、と一瞬考え、自分しかいないことを思い出す。唾と一緒にごくりと飲み込んだ。
「ふ、む…ぅ…、ぅう、ん、んんっ…！」
苦しそうに見える。苦しそうに感じる。それが本当に苦しいってことを、見た目よりずっと辛いんだってことを、僕は知っている。武器だけど、生きているから。ご飯を食べるし、お風呂だって入る。寝る。よく怒るし、笑う。そして、今は泣いている。スレインが泣くのを見るのは、二回目だ。
口を離す。泣き顔を見下ろす。抵抗はない。どこにも。手足を解放し、脱力した体の、傷だらけの胸に手のひらを乗せる。
「一緒に生きよう」
心臓の場所に鼓動は無い。人とは違う。でも。

「いな、ほ」
「なに？」
スレインは両手を伸ばして、僕の頬を挟み、撫で、引き寄せた。鎖骨の窪みに額を乗せて、スレインの手が後頭部の髪を梳く。
「もう、壊してなんて言わない。だから、僕の望みを聞いてほしい」
静かな声だ。たまらなくなる。もう、大人になったのに。十二年も経ったのに。背も追い越して、強くなったと思ったのに。
「僕は、お前の武器だ。武器としてお前に使われお前の命を守ることが、僕にとっての生きる理由だ」
スレインにとって、僕は庇護すべき子どもなんだ。きっと、ずっと。

摩天楼

伊奈帆(35)×スレイン(19)

ブラインドから射し込む光は赤い。空調が効いた室内は適温だが。黄昏時の陰鬱な風を感じたくなり伊奈帆はリモコンのスイッチを押した。控えめな動作音とともに背後のブラインドが上方に取り払われ、巨大なガラス窓が開く。

見える景色は、夕焼け色に赤く染まったスラムの街並み。ごちゃごちゃしていて、小汚くて、反吐と血が地層のようにへばり付き、死体が転がる路地裏と、中毒者と物乞いひしめく大通り。小さな部屋にはロープが下がり、古倉庫では金属バットがうなりを上げて、毎日誰かが誰かの手により殺されて、野良犬がその血肉を喰らう最低の街。以前はそこに僕もいた。記憶の断片、初めは僕と姉がいて、一人になって、そして一人と一挺になった。それからずっと、運がいいのか悪いのか僕らはずっと壊れることなく死ぬこともなく存在している。

摩天楼の頂からかつての住処を見下ろす僕は、あれから何か、変わったろうか。

ノックと同時に扉が開く。僕の返答を待たずに入るのは、彼だけだ。

「伊奈帆。ただいま」

スレインが扉を閉じて笑って言った。頬から耳にかけて返り血が派手に飛んでいる。

足取りは軽い。機嫌は上々だ。
「おかえり」
　時々無性に血が欲しくなる、と言う彼はやはり本性にして武器なのだ。あちらこちらにガタがきていて、武器の形でスレインを使うことはほとんどない。街の実権を得るようになり、実戦は随分遠のいた。いつも何かに追い立てられて、生と死の狭間を行き来するようなスリルが減少したことは、伊奈帆としては悪くはない現状だが、スレインは物足りないらしい。スレインの望む武器を与え、定期的に、毒にも薬にもならない連中を、戯れに彼に狩らせている。
　武器は人の姿で武器を手に、殺戮を生む。
「何人殺った？」
「十五までは数えたが、数が多くて面倒になった」
　スレインは歩み寄り、プレシデント・デスクの端キャディックス・トレイをでん、と中央に置いた。デスク越しに向かい合い、スレインの右手が伊奈帆に伸びる。
「煙草はやめろ、不良少年」
　そうして頭を撫でられる。人の手ような柔らかな感触。今しがた、人を屠ってきたこの手。小さい頃から変わらない。武器とは思えぬ眼差しも。見上げた背丈が同じになり、今は拳一つ下にある。
「少年、ね」

頭を撫でる手に、煙を吐き出す。うわ、煙たい、と彼は撫でていた手を離した。
「こんなに大きくなったのに、子ども扱いはやめてほしいな」
まだ長いシガレットを硝子の灰皿に放る。スレインは巨大な文机の上にひょいと座り、足を前後にぶらぶらさせた。
「子どもさ」
「子ども、ね」
肩越しに振り向いたスレインが左手を伸ばし、ネクタイの中ほどを掴んで引かれた。後頭部を引き寄せキスをする。
「うわ、不味い」
しばらくして口を離すと、スレインはそう言ってけらけら笑った。
「そういつまでも、砂糖や卵の味はしないよ」
三〇過ぎて、君より背丈も大きくなって。大きなアジトを幾つも抱える、裏社会フィクサーになった今でも。
君にとっては、雨の中泥だらけで走って転んだ、小さな子どものままなんだ。
「ほら、今、拗ねただろう？子どもさ」
大人ぶった笑顔が憎たらしくなくなったのは、いつからだったろうか。

35　イリヤの豪雨に銃を撃て

初恋。雨の温度。硝煙の臭い

伊奈帆（50）×スレイン（19）

「…いつから」

「何？」

「いつから、そう言う目で？」

白い肌に油を塗る。細い腕。細い骨。しかし、よく撓る丈夫な体だ。木目細かな肌には使い込んだ小さな模様が無数にあって、隙間に入り込んだオイルでキラキラと光った。

伊奈帆はそっと笑った。笑うのなんて、二人きりにしても久しぶりのことだ。

「そういう目って、どんな目のこと？」

「…もういいです」

ツン、と顎を上げてそっぽを向く。彼の仕草は年々子どもっぽくなっている気がする。

「ごめん、君が可愛くてさ」

肌を滑らす手に力を加えると、愛らしい声が鼻から漏れた。メンテナンスをこんな風に楽しむようになったのは、僕が彼の年齢を追い越してからだった。

磨き込んだ銃身の美しさ。内部のつくりの繊細さ。そして人の記憶と心のかたち。初

めて会ったあの頃に、スレインはもう壊れかけて捨てられていて。僕は彼を拾った。いや、彼に拾われた。僕が生きているのはスレインのおかげ。無茶な戦い方をして、彼の身体を酷使して。スレインはどんなに痛くても辛くても、声も上げずに身を委ねた。僕は装填に軋み声なき悲鳴を上げる彼からジャムった空薬莢を荒々しく排除した。

「もう、変なところ触らないでください」

もう随分、敬語しか聞いていない。若い頃の、ぞんざいな言葉遣いが懐かしい。

スレインの人型年齢は十九歳で止まったままだ。中身は色々変わってしまっているけれど。それが僕にはとても嬉しい。年を取らなくてもいいくらい、大事にできたと思うから。

「変じゃないよ。ちゃんと綺麗にしないと」

「手つきが…んっ」

小動物のように初々しく体を震わせる彼の背には、やはり無数の傷跡がある。僕はその傷を手のひらで撫で、あたためる。角が取れて丸くなって、さらりと滑る綺麗な肌だ。

「いつから、って聞いたよね」

出会った時にはスレインはもう壊れかけていて、それは僕も同じで、半分と半分でようやく一人の命を持って。そうしてずっと生きてきた。僕は彼の命を削るトリガーを引く。スレインは僕の為に銃弾を発射する。そうして、僕は生きてスレインはずっと一緒にいてくれた。もう彼の中身はいろいろおかしくなっていて、時々人が変わったように

なってしまう。前触れもなく、切り替わる。十六歳から十九歳までの数年分を彼の心とメモリーは行き来する。そのうち、生まれた時まで戻るだろう。僕を知らず、傷の痛みも血も知らず、硝煙の香りすらない真新しい、自分を武器だとさえ知らない、命を持ったライフル銃。

「もういいです。あなたは、いつも僕を馬鹿にして」

そっぽを向いてツン、と顎をあげる仕草があどけない。今のスレインは、僕と出会う前に戻っちゃったみたいだな。従順で可愛くていいんだけれど、剣呑な目つきや無遠慮な物言いが恋しくなってくる。彼なら、全部知ってるから。彼の傷も、僕の傷も。そして、僕らの涙の色も味も。

「そうだな…君の」

スレインは顔を横に向けたまま、目だけで僕を見た。

やっぱり。武器にしては、道具にしては、壊れゆくものにしては。綺麗すぎるんだって。その目。そこも好きなんだけどさ。

「君のトリガーを、初めて引いた時」

「それって…」

気恥ずかしくてウインクみたけれど、スレインは怪訝そうな顔を動かすこともしな

かった。まあ、分かり辛いか。
「初めて会った雨の日だよ」
ぎゅっ、と握ると、ひっ、と上擦った声が上がった。そんなに目尻を吊り上げても、頬を赤くしてるんじゃ、意味ないな。スレインがばしん、と僕の肩を叩いた。
「マセガキ」
あ、いつものスレインだ。
「君のせいだって」
「あっ…こら！そんなとこ触るな！馬鹿！」
今度は張り手が飛んできた。ちょっと調子に乗りすぎたかな。
「大好きだからさ。しょうがない」
後ろから肩を抱いた。
「くそ…こんな…責任取れよ」
「勿論。このまましていい？」
「馬鹿！こんなところで…んっ…！」
涙の味はしょっぱいけれど、唇の味は苦く煙い。僕が煙草を吸い始めたのは、初めてキスをした次の日だった。
「ふ…、う…。そんなに、すると…壊れる…っふ、ん」
とろんとした目で遠くを見るのは、もう直せない欠陥だ。快楽で殺戮を放棄する武器

なんて、武器としても、人としても壊れてる。
「優しくするからさ」
本当、君のせい。壊れかけの武器を、この世の全てのように失い難く感じるのは。

シロツメクサ

伊奈帆（8）×スレイン（16）

「はい」
視界を埋める空の青が遮られた。
「え？」
屈みこんで、寝転がった僕を見下ろしているのは数日前、雨の日からの相棒。頭の回転が速く、思考が柔軟。俊敏で、判断力と決断力が突出している。見切りも抜群。銃器の扱いも手慣れたものだ。
「四つ葉。見つけた。クローバー」
一つだけ難を言うなら、年齢は八。幼すぎる。僕とともに在るのには。でも、それは仕方がないことかもしれない。生きるためには。
硝煙の香るシロツメクサの丘。日は昇ったばかり。朝露にきらめくハートの形の揃いの葉。
「よく、見つけましたね」
スレインが褒めると、伊奈帆はなぜか口を尖らせた。何が気に入らなかったのだろう。
「ねえ、手を出して」

「手？」
「ほら。はめてあげる」
茎を一周させ、クローバーのリングが出来上がっていた。それを戴く小さな手。これは人の手。子どもの手。まだ柔く傷の少ないその手が、僕を握り締めトリガーを引く。人を殺すために。自分が生きるために。
僕は、この子どもの武器。
伊奈帆は首を傾げた。
「どの指がいいかな」
似つかわしくない行動と言動だと思ったが、草花の指輪を作る手の慣れた様子に思い出す。
そうか。お姉さんがいたんだった。こうして、草花を飾り遊んだ風景が思い出にあるのかもしれない。
スレインは人の身体の左手を差し出した。
「じゃあ、お姉さん指に」
遠景で、銃声。

トカレフとペカー

Hand Gun

軍人伊奈帆(18)×武器スレイン(16)

ゴッ。

「…痛いな」

起動と同時に、右ストレートが飛んでくるとは思わなかった。

「何をしている」

仰向けの武器は瞼を開き、剣呑この上ない表情で伊奈帆を睨みつけている。

「いや、スイッチを入れたんだけど」

嫌悪感を顔いっぱいに浮かべ、組み敷いた人の形が身じろいだ。

「電源ならもう入った。早く抜け」

「あ、そうだね」

ずる、と中指を引き抜くと小さな呻きが見下ろす喉を震わせた。じんじん痛い頬の感触を想起する。拳の温度は人肌だった。

人の手。人の足。人の胴体に人の顔。人の温度の人ならざる武器。一昔前の、趣味に走った高級武器だ。今では生産されてはいない。

人間なら十六歳か、十七歳くらいの造形だろうか。細身で華奢な少年の姿をしている。金とも銀ともつかない美しい頭髪と、エメラルドのような美しい発色の両の瞳。滑らかな白い肌は陶器のようだが、無数の傷が刻まれている。戦場でついた傷か、不届きな楽しみでつけられた傷かは、僕は知らない。かつて、どんな場所でどんな人間に使われて

いたのだろうか。
「お前は、僕の新しい持ち主か」
人間ならば、全裸で男に馬乗りになられて、秘部に指を挿入された矢先にそんな口を聞くものはいないだろう。
「そう。君は僕の武器」
「そうか」
あっさりそう言い、武器の瞳が輝いた。これは比喩でも何でもなく、持ち主を認識し発光したのだ。システムを書き換えている。情報を情報で上書きする。人ならば過去、思い出とも呼べる使用経歴をリセットし、僕の意のままにカスタマイズする。
これは武器だ。間違うな。
「使用者の名前は」
「界塚伊奈帆」
「何と呼びますか」
「伊奈帆」
「私の名前を入力してください」
名前か。
視界の隅に窓の外。宵闇に黒い翼を見た。
「コウモリ」

「武器の形態を選んでください。同時に設定できるのは二つまでです」
「トカレフとペカー」
「設定しました」
「続いて、人型の設定です。服装はどうしますか」
「軍服」
「色は」
「紺」
「言葉遣いは」
「丁寧に」
「人間形態の食事、睡眠、洗体をメンテナンスに位置付けますか」
「する」
「嗜好品は」
「卵料理かな」
「使用者との関係性をオプションで設定しますか」
「どんなのがあるの」
「武器、友人、恋人、兄弟姉妹、親、子ども。敵」
「敵？」
初めて聞くオプションだ。

「敵っていうのは、どういうこと？」
「使用者の生命以上に、使用者の思想を優先します」
考える故に我あり。
「時と場合により、使用者の思想を優先し使用者の命令を放棄します」
「唯一、自爆という手段を用いて使用者を殺害することができます」

「じゃあ、敵で」
「了解」

電子の光。光学迷彩を武器が纏う。そして現れたのは、濃紺の軍服を着た少年兵の姿。指定した武器の祖国によく似合う出で立ちである。両の手に手袋をしていた。
「界塚伊奈帆少尉」
少し緊張した声で、その武器は軍人らしい所作で惚れ惚れするような敬礼をした。
「貴方の刃、貴方の銃弾。貴方の武器。僕が貴方を守ります」
生真面目そうな表情と規律正しい振る舞いは、先程この頬に拳を打ち込んだ武器と同じとは思えない。
「うん、よろしく。コウモリ」
握手を求めると、コウモリはおずおずと右手を出した。手袋越しに握った右手はやは

り人肌。
「はい」
下がり眉の笑顔は、やはりさっきと全然違って拍子抜けする。
「ご飯食べる？」
「いただきます」
素直。本当にこの少年が、機関銃や拳銃に変化し、敵を殲滅するのだろうか。
「出撃は、半月後」
「はい」
いっぱい当てるよう、頑張ります。そう言って、また困り眉で武器は笑う。そのあどけない顔を見て。伊奈帆は思う。
前の持ち主は、一体どんなやつだったんだろう。

「あのさ」
「…分かっています」
闇が深くなり、そして発光。青い光が鱗粉のように収束すると、夜目に鮮やかな月色が現れた。
「すみません」

ばつが悪そうに俯く軍服姿の少年に、伊奈帆はふうとため息をついた。ばっちり聞こえているはずだ。
「コウモリ」
「はい」
「やりすぎ」
「…すみません」
薄い肩をこれ以上なく縮こまらせて、機関銃から人の形へ姿を変えた武器はか細い声で謝罪した。文句の一つも二つも三つも言いたいが、ここまで殊勝だと、こっちが悪いことをしたような心地になってくる。
「ま、君が生きていたからいいか」
「あの、伊奈帆」
「何？」
伊奈帆の武器は心配そうに小首を傾げた。
「怪我は？」
「何も。君がいたからさ」
武器は笑った。血と焼けた肉と硝煙の匂いの只中で。
「どうも、ああいう連中には加減ができなくて」
見てくれは愛らしいが、言うこととやることは脇汗が冷えるほど物騒なのだ。まあ、

これは武器だ。破壊の道具だ。物騒なのは当たり前か。
「帰ろっか」
「はい」
瓦礫を踏み越え、コウモリが伊奈帆の横でにこりと笑った。こうして並ぶと同じくらいの背丈だが、体格は一回り小さく華奢だ。少年らしい体の厚みは、この武器が時を止めた存在であることを象徴しているようにも思える。伊奈帆は「これ」を使い、「これ」は伊奈帆に使われる。それが人と武器の関係だ。
しかしなぁ、と伊奈帆は思案する。武器と「これ」を割り切るには、どうも人間臭くていけない。
「お腹すいたね」
「あ、料理するんですか？」
「うーん」
今から料理。面倒といえば面倒だが、戦闘後の汚れきった格好で寄れる店もないし、そもそもこの近辺の建造物は蜂の巣だらけで人もいない。エネルギー切れで武器は飛べず、歩いて帰って風呂に入って、その後の夕食か。レトルトの誘惑はあるが、期待の眼差しを感じる。こう、きらきら、って感じの。
「卵なら、あるけど」
「わあ」

歓声に腹をくくる。全く、武器のくせに。こんなに感情表現が豊かだなんて聞いてない。
「何作るんですか？だし巻き卵ですか？それとも、スクランブルエッグ？」
「君は、どっちがいい？」
横目で見ると、猫目をくりっと動かして、「それ」はくすりと笑った。
「だし巻き卵がいいです」
「決まり」
笑顔の武器に頷いて、伊奈帆は出来心で、ふと、なんとなく、手を握ってみた。
手袋。湿り気を帯びて温かい。
「ねえ、好きな食べ物って何？」
「卵料理です」
「その中で一番好きなやつ」
「どれも好きですよ。そもそも、そう設定したのは貴方です」
「そうだった」
武器を手に歩く。月が黄色い。うまく割れなくて膜が破れた黄身みたいな形だ。
「今日は、だし巻き卵なんだね」

「ええ」
武器は身を寄せた。肘と肩がぶつかって歩きづらい。
「多分、伊奈帆が食べたいのはそれだろうと思って」
くう、と腹が鳴った。聞こえたようで、コウモリは目を細めて笑った。
「当たり」
使用者のメンテナンスも、プログラムされているのだろうか。

Deep・Green

Automaton or Electric Mutton

軍人伊奈帆(16)×武器スレイン(17)

伊奈帆は眼前の品物に眉を顰め、隣の男にこう言った。

「僕は、武器を求めて来たのですが」

小汚く怪しい路地裏の隙間を埋めるようにひっそりと建つ細いビル七階の一室。何の変哲もないアルミ製のドアノブを捻り開くと、異次元めいた空間が広がっている。

所狭しと並べ吊るされ一部は重なり合って小山を形成しているのは、サイケデリックな色彩を展開する古今東西の珍品である。様々な種類と用途の照明があらゆる方向から室内を照らし出し、影が幾重にも重なり合って複雑極まりない陰影を四方の壁と天井、床に投影しており、香炉からは薄い煙が燻っていて、不可思議な匂いが充満している。

今の時代こんなに怪しい場所もない、と伊奈帆は常々思うが、口に出したことは無い。

蒐集家である店主はこの魔窟めいた一室に全く不釣り合いの、こざっぱりとした青年である。

「武器ですよ」

アンティーク・ディーラーを自称の店主、マズゥールカは、部屋の片隅、高さは二メートル近い円柱形のケイジの中、スケール1/1の人形を指差した。白磁のような滑らかな肌と柔らかそうな淡い金の頭髪が印象的な、スマートな男性形。一見すると、昔気質の職人が丹精込めて造り上げたビスクドールのようにも見えるが、身に着けている衣服は

病院着のような質素な薄青の上下。釣り合わないことこの上ない。手足を折り曲げ、膝を抱え尻をつき座り込んでいる格好だ。
しかしこれは、愛玩用の人形ではない。髪に半分隠れているが、繊細な造形とは裏腹の無遠慮な赤い識別番号とバーコードが首筋に視認できる。
「マトン？」
機械仕掛けの人型兵器―オートマトン―通称マトン。俗称は電気羊。
こんなところに、まだあったのか。生産は中止されて久しい。多くは壊れて、軍の管轄には一体たりとも残ってはいなかったが。
「ええ。使い古しの中古品ですが、一級品の出来栄えです」
パーツも組まれたシステムも、そこらじゃお目にかかれない。ちょっと出来が良すぎるくらい。使いどころの分からない回路もわんさかで、これはもしかしたら、敵さんの落とし物かもしれません、とマズゥールカは眉を大げさに上下させた。
恐らく軍の最高機密に触れる、技術と金をつぎ込んだ殺戮兵器。がこれなのか。店主も中々に危ない橋を渡っている。
「珍しいでしょう。上客には死んでほしくないですからね。貴方のために、取っておいたんです」
店主はパソコンを小脇に抱え、鳥籠のような檻の錠を開け、中に入った。マトンの首のソケットに端子を繋ぎ、キーボードを叩き出す。識別番号が発光、点滅し、起動のた

めの設定を組んでいるようだと分かった。
「まだ買うとは言ってないよ」
「良い武器ですよ。強い。それに、少し傷が付いてはいるが綺麗です」
マズゥールカはおもちゃを自慢する子どものような声音で言った。
下を向いているマトンの顔形は、立ったままの伊奈帆の位置からはよく見えないが、受ける印象は話に聞いていたよりもずっと生々しく伊奈帆の隻眼に映った。
まるで人の死体のようだ。これで動いて喋ったら、とても武器とは思えないかもしれないな。
「ただの道具です。見てくれだけは綺麗だけれど、油断をしたら使う貴方も死にますよ」
だから、生産が中止になったのだとマズゥールカは笑みを濃くした。
「それで、どうします。今度は規模がでかいでしょう？コレが嫌なら、あとはダイナマイトでも体に括っていきますか」

ウィ…ン。

微かな機械音とともに瞼が一定の速度で開き、傾げていた首が床に対して垂直になる。兵器のその目がはっきり伊奈帆を映した。認識した。
「ああ、こちら勝手に、貴方を持ち主に設定しちゃいましたよ」

正面向いてこちらを見据える顔の造形は、少しばかり意外だった。もっと甘く、均整の取れた顔立ちを想像していたが、少し厚ぼったい唇の形と重く気だるげな瞼は甘く柔らかいのに、鋭角な顎と三白眼に近い鋭すぎる目の形、その目の青味がかったグリーンの、ラグーンのような透明な深さがどうにもちぐはぐで不安定な印象だった。今思うと形だけでなく全体の色彩も、作り物にしてはくすんでどこか儚げだ。美と言い切るには欠陥だらけで病的で、醜とするには全体の印象があまりに複雑に入り組んでいて目を離せない。全ての要素が、美と醜のぎりぎりのバランスで配置されている。計算付くなら、見てくれだけでもこれは世紀の傑作だ。

大した執念だ、と伊奈帆は技術者を評価した。

「…分かりましたよ」

ガラス玉のような透明感のある碧色の瞳に、迂闊にも目を奪われた。そんな色をしていたのか、と思ってしまった自分に残された選択肢は一つ。

伊奈帆はため息を一つ吐き、店主に向かって頷く。

「貰い受けます。彼の値段は？」

ピッ。

「はい、お買い上げありがとうございます」

バーコードリーダーの光線の赤が品物の首から鎖骨、そして肩を掠めてレジカウンターに戻された。伊奈帆はケイジから出され、初期化し電源を入れられた品物の頭から爪先まで視線を一往復させた。服装は先ほどの上下のまま、薄い靴底の黒い靴がプラス。瞬きもしない無表情だが、そこか寂し気に映るのは眉の形と厚い瞼のせいだろう。
赤味の全く無い唇が小さく動いた。
「…よろしくお願いします」
受け渡された品物が口を利いたのだ。所在無げな立ち姿は遊びの輪に入れない子どものようであるが、あいにく彼は子どもではなく人でもない。伊奈帆よりやや高い視線が機械的に宙を泳ぎ、伊奈帆の顔に定まった。
瞬きもしないくせに、仕草がやけに人間臭い。
「行こうか」
コクン、と頷く首の動きはぎこちない。狭くて暗くてじめじめしていて、部屋のどこかで焚いている香の煙で喉が痛い。
「またのお越しをお待ちしてます。次は、ワッペンのラインが増えていることを願いますよ」
マズゥールカが顔の横で右手をひらひら振った。
「命があったら、また来るよ」
伊奈帆は錆びた扉のドアノブを回し押し、扉を開いて外に出た。

雨だ。傘はない。
カン、カン、カンと錆で茶けた階段に足音が二人分。先程買い上げた「彼」は何も言わずについてくる。
物として扱われ、表層部分に擦り切れた傷跡を幾つも残しすっかり慣れた風をして、その実目だけは剣呑だ。
自分に向かって胸の内で伊奈帆は左右に首を振る。電気羊に、意思などありはしない。
しかし。
「あのさ」
伊奈帆は、意思が無いとは思えない、深い碧〈ディープ・グリーン〉を肩越しに見上げた。古びて傷の刻まれた骨董品との距離は、段差三つ分。
「なんですか？」
機械の声は低音で、柔らかい。
瞳は礁湖の底であり。
雨に降られた髪は月。
覗く肌の鎌鼬の爪遊び。
モノではない。人か獣か妖か、と伊奈帆はしばし見惚れた。

「…いや。君のこと、何て呼べばいいのかな」
これは、人の形をしているが人ではない。でも。
「名前、ある？」
はい、と返事は歯切れ良い。
「武器になる前は人でしたから」
非合法に製造されるオートマトンの極少数は人が素体。勿論違法、御法度だ。しかし、低コストでそして強い。これまで破壊したドールの内、記憶に焼き付き離れないのは人であったマトンたちだ。電気羊と呼ばれたモノは、人の成れの果てだったのだ。
そうか。生贄の羊か。皮肉な言葉遊びに伊奈帆は一度深く瞼を閉じた。。
眼前の武器もまた、そうなのだ。命を希釈され、生と死のどちらからも遠ざかってしまったかつて人であったモノ。
「君はかつて、人だったんだね」
見下ろす武器の顔を見あげる伊奈帆は、ふと、月なんて、もう随分見上げていないと思い至る。どうしてこんなことを考えているのだろうか。
雨に濡れた唇は白い。温度はきっと、人よりずっと低いだろう。
「人間の頃の名前は記憶しています」
言葉の内容に反して、それは柔らかな笑みを浮かべている。月のような微笑みだ。歪に翳り、それ故に美しい。

「なんて呼べばいい？君のこと」
月の化身のアンティークは二度瞬き、白皙をくしゃりと綻ばせこう言った。
「スレイン」
雨音に馴染むその名前。
「スレイン」
伊奈帆は繰り返す。
月と降る雨は、きっとこんな風に寂しく一人で笑うのだ。

「さあ、入って」
武器を伴い帰還した。というのも、変な言い方だ。武器は自立し歩く。
「お邪魔します」
そして、喋る。
住居は、軍管轄ではない2DKのアパート。一人で暮らすには十分な広さだと認識しているが、これからは少し手狭になる。伊奈帆が靴を脱ぎ上り框に歩を進めると、スレインは真似して靴を脱いだ。スリッパはいるのかな、と考え、どうも調子が狂うな、と自分の思考を意外に思う。
「僕はご飯を食べるけれど、君はどう？」

寝室で上着とネクタイを外し、伊奈帆はキッチンの椅子に掛けてあるエプロンを手に取る。その様子を、スレインは興味があるのかないのか判然としない顔で眺めていた。彼には買い置きのスリッパを与えた。棒のように突っ立ったまま、スレインは首を横に振った。
「僕は武器ですから」
「答えになってないよ」
人間みたいなやつだと思い、人間だったと言っていたな、と伊奈帆は購入直後雨の中での彼との会話を思い出す。
「食べることは可能なの？」
高額なマトンほど、人間に近しく作られている。食事ができる個体もあったはず。
「摂取した食物はエネルギーに変換されます」
スレインがガラス玉のような無機質な瞳で、じっと伊奈帆を凝視した。
「僕は界塚伊奈帆少尉の武器です。名前や食事は、何故ですか」
そう来るか。伊奈帆は、もはや自分はスレインを武器としてだけ認識しているわけではないと、今更ながら気がついた。
どうしたものかな。
「…僕は料理が好きなんだ」
結局、本音を少し話すことにする。スレインは微動だにせず、口を挟まず、こちらを

向いて聞いている。
「前は家族がいたから、食事は僕の担当だったんだけれど」
この感傷めいた感情は、機械仕掛けの羊の回路にどのように伝達されるのだろう。
「一人だと、どうも料理をするのが億劫で」
スレインが首を左右上下に巡らせた。そして頷く。料理を作る対象が前はいた、今はいない、ということを確認したのだろう。
「武器でも、道具でも、食べてくれる相手がいるなら料理をするし、僕も食べる」
伊奈帆はエプロンに頭と腕を通して腰の背釦を留めた。
「そんなところだ。理由は」
「了解しました」
言って、スレインが右手を胸から腹に下ろすジェスチャーをした。
「食材が乏しいから、今日は簡単なものしかできないけど。一緒に食べてくれる？」
「はい。いただきます」
真面目な顔でしっかと頷く武器を見て、律義な奴だな、と伊奈帆は思った。

パンとスープ、そしてオムレツ。しかもスープは粉末状のレトルトだ。シンプルすぎる献立だ、と出来上がりを見て伊奈帆は思うが、すっからかんに近い冷蔵庫の在庫と火

を使った食事など三日ぶりなことを考慮するとそんなに悪くもないか、と一人合点する。
「スレイン。出来たから、運んで」
「はい」
立ったままでは落ち着かないと伊奈帆に謂れ、ダイニングテーブルに姿勢よく腰掛けていたスレインは返事をして頷いた。そして実に素直に盆に料理を上げ下げしてキッチンとテーブルを往復する。伊奈帆は沸かしておいた湯を急須に注ぎ、それを持ってテーブルに着く。
「さあ、食べようか」
伊奈帆が座った正面にスレインが座り、両手のひらを合わせる伊奈帆のジェスチャーを武器の彼も真似をした。
「いただきます」
言って、ちら、と前を見遣るとスレインは小さく頷き口を開く。
「いただき、ます」
少しぎこちないがまずまずだ、と伊奈帆は笑みを漏らした。箸を持ち上げ椀を持つ。
「伊奈帆少尉」
スレインが、箸を右手に伊奈帆を呼んだ。意外にも、箸を使えるようである。
「伊奈帆でいいよ」
食事の時くらい、仕事のことは忘れたいと伊奈帆は思いそう言った。しかし、武器と

栄養補給をしている様は理屈で言えば仕事の内とも言えるのか。
「伊奈帆」
スレインが人間みたいに小首を傾げ、ふっ、と空気を鼻から漏らした。
「伊奈帆は、変な人ですね」
はにかんで笑うスレインは、箸で器用に半熟の卵を小さく切り分け口に含んで頬張った。

雨を喰らう炎。
地獄があるとするならば、そこは戦場と同じ匂いがするのだろうと伊奈帆は常々考える。血と、肉と、草土と。鉄と命が焼ける臭い。黒々とした煙はこの世の業を全て含んでいるかのように空に立ち込める。
伴う武器は、生気の乏しい無表情に返り血と埃を頭から浴びて、まるでリビング・デッドだ。これまで数度、戦に連れ出したが、彼は人型でも存外に強い。いい買い物をした、と現金な思考が浮かぶのは、戦の高揚のためだろう。
「スレイン、いる？」
「ここに」
背後から、すぐに返答があった。

戦いの最中に、辺りがざあっと遠ざかり、自己に没入していく感覚がある。湖底に深く潜るような、刃の切っ先を研ぐような。その一時が嫌いなだけではないけれど、取り付かれればきっと人ではいられまい。
「スレイン」
僕が地獄に落ちるのは、できればもう少し先がいい。
「はい」
返事より早く、彼は両腕に金属の光沢を纏った。青白く発光し、人の形が変化する。手足と胴体には光沢のある白い外部装甲、頭部には赤と金の複雑なデザインのゴーグルが装備され、人の形の目の上下に合計六つの複眼が瞳と同じ碧の色で現れる。そしてその背には、本体よりも大きな流線形の三つの白い翼。
オートマトンとしての、スレインの本来の姿だ。
「すぐ飛べる？」
「はい」
肩にしがみつく。スレインの両足がミシミシ軋み、バネのように飛び上がる。洒落にならない近景で爆煙が上がった。
武器の背に乗り、上空から見る戦場は、火星の大地ように赤い。この星の終わりも近いのかもしれない。
伊奈帆は空の色を見た。生まれてから一度も止んだことのない雨が、戦場に降り注ぐ。

雨空しか知らない世代の伊奈帆には、かつてはこの灰色が青かったなんて御伽話のようだと思う。
「伊奈帆。あそこに二人。撃ちますか」
思考を戻す。スレインが示す先を同期した左目が認識。傷を負った敗走兵だ。
「いや、いい」
「了解」
滑空する白い翼は、地上の兵の目にはどのように映るだろうか。鳥という生き物に見えるかもしれない。いつか映像記録で見た、獲物を捕らえる海鳥に。
それにしても、大した武器だ。武器の背の上、伊奈帆は汽笛のような口笛を吹く。

スレインは武器だ。最高級の材料と技術の粋を集めたオートマトン。しかし、彼は人だった。
生身の人間を材料にして改造を施した生きた武器。人体実験。
敗戦国の兵士や奴隷、時に王族が、オートマトンの素体として使われたことは学生の頃のテキストで知ってはいた。
しかしそれは、世紀を跨ぐ前の話。西暦二一一六年の現在では、オートマトンに関す

る違法改造、取引は国家レベルの重罪だ。

『スレイン・ザーツバルム・トロイヤード。ヴァース帝国軌道騎士』

出てきた画像は少し荒い。中世ヨーロッパの騎士のような、当時にしても時代錯誤な赤い軍服を纏い、檀上で演説をしている光景を切り取った一枚。髪は今より短く切り揃えられており、肉付きは今よりしっかりとしている。鋭い目つきと引き結んだ口元は、強い意志の力を感じさせ、堂々たる態度と相まっていかにも時代を切り開く若き将といった風貌。地球の生まれでありながら、身一つでのし上がったカリスマ。時代の寵児か。いや、その後彼が辿った運命を鑑みれば異端児か。

「まさか、学校の教科書にも載っているような有名人に、実際お目にかかれるとはね」

『火星皇女アセイラム・ヴァ―ス・アリューシア暗殺未遂事件から勃発した、惑星間戦争首謀者』

こんな年代物が壊れず、そして高い性能を維持したまま闇市に流れていたとは。人の命は尽きる時間、死を奪われて武器と身を変え世紀の大罪人は今更、何の夢を見る？

『二〇一六年、処刑執行。享年十七歳』

十七歳か。やはり若い。僕より少し、年上だけど。

左目が演算を終了した。

まあ僕も、人のことは言えないか。この体も、全てが生身のわけじゃない。

妖刀を抱く

Bewitchied Blade

R-18

浪人伊奈帆(17)×武器スレイン(16)
和物パラレル

「これは？」

「ああ。それは、お辞めになった方がよろしいでしょう」

伊奈帆が目を留めたのは、ひっそりと立て掛けてあった細い刀身の太刀。飾り紐の色が、黒光りする鉄鞘には不釣り合いな翡翠色だった。

「なぜ？」

「妖刀でさ」

妖刀。確かに、妖気めいた感触が漂っている。

「迷信？それとも他に、買い手がいる？」

「いえ、旦那を死なすわけにはいかないんで」

主人が身を乗り出した。若く軽率に見えるが、刀鍛冶としての腕は確かだ。

「生き血を啜る、妖刀で」

一目見てからずっと、伊奈帆の隻眼は鞘で覆われた刀身を凝視している。目が離せない。何か、匂いや色のついた空気が自分を手招いているようだ。

「本当に売る気がないなら、納屋にでも仕舞っておくんだね」

「伊奈帆の旦那！」

手を伸ばした。温度を肌が察して手を引っ込めそうになる。しかし伊奈帆は動きを止めずそのまま鞘を握った。びり、と変な感触があった。炎のような、氷のような。肌が

焼けたと錯覚する刹那。時を失うような温度を感じたのは一瞬で、もう、ただの鞘だった。
「これにする」
「旦那がいいなら、それで」
室内の家具の配置を確認して、腰に刀を抱き。
居合抜く。
――ヒュ。
遅れて、音がした。
白銀の美しい動線が目に焼き付いた。衝撃波で木造りの小屋の壁に傷が入っているのがわかった。
軽いし速いし、よく切れる。
「号は？」
刀工は、後ろ手で頭を掻いた。
「誰も知らねぇ」
何しろ、すぐ死んじまうから。

「これは？」

手渡すと、丸く開いた目がきらきらと光をたたえて伊奈帆を見返した。小銭を仕舞って、歩き出す。桜の花弁が雨のように降る石畳。眼前には赤い鳥居と、連なるぼんぼり。賑わう出店。
「林檎飴。知らない？」
「初めて見ました」
かぷり、と食べた唇が赤く染まった。彼は紺色の着流しの裾をひらひらさせて、僕の斜め後ろをついて来る。
「う、わ」
声がしたので咄嗟に手を伸ばし振り返る。どうして振り返る前に手を伸ばしたかって？こいつ、すぐ転ぶ。もう、何度目だかわからない。
縁日の人混みに攫われそうな刀の手首を掴む。細い骨と肉の柔らかさ。武器のくせに、なんて手首をしているんだか。
「スレイン、大丈夫？」
「あ…ありがとう、ございます。伊奈帆」
夜桜と雪洞の下。花を手折ったこともないような顔で笑うのは、人の形をした妖刀。
——僕の武器。
あの静かな夜。空気は少し湿っていた。その日もいつものように刀を振るい、襲い掛

かる火の粉を振り切った所。最後の人間の喉首を飛ばしたところで突然、刀が光った。見たこともない、青い光。
光が収まる頃、手の中に刀はなかった。
かわりに。
人の形をしたものが立っていた。
「…は？」
今思うと、その時の僕は相当な間抜け面だったろう。夢でも見ているのか、と思ったくらいだ。血の匂いが、これは現実だと物語っていたが。
「…えっと」
向こうも何を言っていいかわからず、呆けた顔をして立っていた。両手両足を鮮血に染めて。
雨の降りそうな月隠れの夜、嘘せ返るような血の匂いの中。向かい合った僕らは、しばらくじっと見つめ合っていた。
まさか、刀が喋るとは。いや、それ以前の問題だ。刀が。
形を変えるとは。
「…君、誰？」
「刀です」
即答だが、自信なさそうな声音だった。まるで人間のような。伊奈帆は眼前の風景の

中心に目を凝らす。
目の前に立っているのは、不思議な色彩の男だ。骨のように白い肌と、藁のような薄い頭髪。大きく吊り上がった目と尖った鼻。長い手足。そして、その目。
なんだろう、この目。見たこともない色だ。翡翠のような、箱に入れて飾ってでもおきたいような、独特の瞳。
どう見ても、この世のものとは思えない。
刀？
「刀って？」
こくりと頷く仕草は、思ったより幼い。よくよく見ると、自分とそう変わらぬ年齢のようだ。異形に年齢などあるのかは、知らないが。
「貴方が、新しい持ち主ですか？」
なんか、嫌な言い方だ。持ち主といえばそうだけれど。しかし声が全く媚びていないのは気に入った。淡々としている。伊奈帆は一歩、また一歩と近づいた。微動せず、見返すその瞳の色。
囚われてしまう。
「今、刀って言った？」
「言いました」
「刀が喋るか？」

いやいや、それよりも。
「人じゃないか」
三寸ほど先、血塗れの妖は怒った顔で背筋を伸ばした。背は少しだけ、彼のほうが高いみたいだ。
「刀でもありますし、人のようでもあります」
「ようなもの？」
そいつは妖しく微笑んだ。両手を伸ばす。白い、白い腕が雲間の月に照らされて、銀色に輝いた。腕を一薙すると、周囲の笹が竹から千切れ登り龍のように舞い上がった。
「生きた武器なんです」
ぱらぱらと落ちる笹。竹の香り。
僕は聞いた。
「銘は？」
「さあ。いっぱい傷がついて、忘れました」
「号は？」
すう、と空気が冷え込んだ。ぽつ、と水滴が鼻の頭を濡らす。
雨。
「スレイン」
なるほど。雨降らしか。

「僕は伊奈帆」
「どうぞよろしくお願いします」
僕らが降らせる雨は、赤いのだろう。

妖刀とは。
神通力を持つ刀。それ以外に、詳しい定義はない。持ち主を切り殺したとか、独りでに動き出すとか、燐光を放つとか。
確かに、得も言われぬ力を感じた。引き寄せられるように手に取り、鞘から放った瞬間。これだ、と思った。
欠けていたものが満たされるような。水面に映る月に、椿が落ちるような。風の中に、忘れた歌が溶け込むような。美しい静けさ。腰に帯びると、ぴたりと寄り添う心地。鞘に手をかけた時の、肌が粟立つ高揚感。刀を抜く一瞬の、永遠のような心中(しんちゅう)の白さ。全てが終わった後の、赤く染まり光る抜き身の刃。
そうして笑う、美しい人の形。
最高の刀だ。妖刀でも、魔剣でも、何でもいい。思うままに、刀を振るえるなら。
戦い、忍び寄る死を否定することができるなら。

カラン、と鳴る下駄の音。
「こういう場所は、初めて？」
スレインが林檎飴を舌先で舐めつつ頷いた。目が周囲を見渡す。
「ええ。人間というのは、色んな形をしているのですね。知りませんでした」
「そんなに違うかな」
「あんなに小さい人や、鮮やかな人は知りません」
視線を追うと、手をつないだ母子が歩いていた。楽しそうに笑い合っている。
「侍や刀工ばかり相手にしていては、珍しいのも当然か」
「こんな甘いものを食べたのも、初めてです」
またぺろり、と飴に舌をつける。中の林檎に到達するのは、いったいいつになるだろう。教えてやる義理もないので、伊奈帆は自分のべっ甲飴をがりがりと噛んだ。歯に引っ付いて、口の中が甘ったるい。
「食事はしないの？」
「必要ないので。勧められて、酒や酒肴を口にしたことはありますが」
石段を下りる。喧騒が少しずつ遠のき、闇が深くなる。伊奈帆はスレインの袖を引いた。
「寄り道して、帰ろう」

「はい」
嬉しそうに、宝玉の目が弓なりになった。指を絡めて、雑木林へ忍び込む。

星が降りそうな夜だ。
明るい夜は、嫌いじゃない。しかし、暗い闇夜の方が好ましい。
「全く、こんな日にも出るとは。暇な連中だ」
伊奈帆らを取り囲むのは、獣の体に人の顔。所謂人面獣が五体。赤茶のは牛。たしか件とか言ったか。黒いのは雉で、白いのは獅子。銀の二つは番の蛇だ。交尾の最中だろうか、ぐねぐねと体をうねらせて気色が悪い。余所でやってくれないか。
「伊奈帆」
「悪いけど、林檎飴は諦めて」
スレインが姿を変えた。手の中に収まる柄。指に吸い付く臙脂の諸捻り。
『後でまた、買ってくださいね』
「生きていたらね」
キン、と片刃が冷えた。スレインは、刀でも人でも、実に正直で単純だ。そこが気に入っている。いや、そこも。
『冗談ですか』

「そう」
『面白くありません』
言えてる。腰に構えて、目を閉じる。耳を劈く獣の唸り声がサアッと遠のき、神経の真円の中心に針が落ちる。

異形の妖に刀を振り下ろした。伊奈帆が殺す対象は二つに分けられる。
人と、そうでないもの。今日は後者。気は楽だが体力的にかなりきつい。前者は前者で、心労が嵩む。どちらも嫌だが避けられないのだから仕方がない。
「数が多いな」
牛の化け物の角を落として、伊奈帆は地を蹴り回転しつつ飛び上がった。素早く左手で眼帯を外す。あんまり使うと疲れるけれど、仕方がない。
現れたのは、血のような目。視界は広く深くなり時間が止まるような感覚。
妖刀が珍しく戦闘中に言葉を発した。
『大丈夫なんですか？』
「問題ない。喋ると舌噛むよ」
『今日の冗談は、特に面白くないですね』
速さと威力を数倍増した斬撃で、今度は獅子の首を切り落とす。

死屍累々。肉片を踏まないように歩き、開けた場所でどっさりついた汚れをやけくそで払い、伊奈帆は刀に聞いた。
「戻る？」
人の形になるか、という意味だ。言っておきながら、どちらが本性だろうか、と首を捻る。刀が本来の姿であれば、今の物言いは適切ではない。
『…どうしようかな』
「林檎飴、買いに行く？」
刃がきらりと光った。心は動いたらしい。伊奈帆としては、人の形が気に入っているし、一応逢引めいた算段もあったのだから、帰りに刀を下げて帰るのは御免被りたい。
『…血で汚れたから』
生娘のようなしょげた物言いに、鼻から息が漏れた。もう一押し。
「暗いから、わかりゃしない」
『…そうですね』
言うやいなや、青く発光して光の化身のような青年が現れる。頬と手に、赤い色が残っていた。刀身を指で拭っても、落ち切らないか。スレインは両手をまじまじと見て、眉を下げる。

「やっぱり、ちょっと汚れてます」
顎を掴んで、赤い頬に舌を這わせる。びくり、と体が震えたのが分かった。硬直した彼の頬を嘗め回す。血と脂の臭い味。
「取れたよ」
星明りの下でもはっきり分かる。今この頬が赤い理由が、さっきと変わったってこと。
「…え、と」
次は右手。手首を引き寄せ爪の間に尖らせた舌を往復させる。指紋。指の皺。指の間。手の平の線一つ一つ。血の味だか、汗の味だか、もっと違う何かなのか、だんだん分からなくなってくる。指がぴくぴくと震えて、熱っぽい呼吸が聞こえる。愛らしい反応に、じゅ、と強く掌を吸うと今度は声が上がった。見上げると、スレインは左手で口元を抑えて肩を竦ませている。
「…ちょっと。…も、もう…いい、ですから」
「まだだめ」
「あン…っ！」
肘まで浮き出た血管をツツ、と舐め上げる。上擦った声が漏れた。
「感じた？」
「…っ、馬鹿！」
膝を掬う。軽い体を草の上に横たえる。抵抗はしない。そういう決まりだから。紺の

襟の隙間に手を入れる。肌は刀剣らしくひやりと低い温度。滑らかな肌を撫で上げて、袂を寛げ首に吸い付く。
「ンぁっ…ん…！」
捲れ上がった裾から伸びる素足。膝の裏を肩に引っ掛けて、足の根本を揉み込んだ。わなわなと腰が震える。左手で尻の間に指を滑らせ、右手で平らな胸を押した。固い突起に布地の上から爪を立てる。腰が跳ね上がる。
「ひっ…ッ、ァ、あ…あ…ァ」
目に涙が滲んできた。恥ずかしいのか、気持ちいいのか。ま、嫌ではないだろう。その証拠に、肩の後ろで足が強請っている。もっと、もっと、と丸い踵が背を叩く。
「もうさ、こんなになってるよ」
ぐちゅぐちゅと下腹を掻き混ぜ、ひくつくそこを広げていく。ひっきりなしに甘い声が喉から溢れ、白く輝く喉に歯を立てた。口を離すと、赤い歯型が三つ。
「ぁ…！あ、ンっ…も、…い、ィ…から…」
早く、と抜身の刃のように美しい両腕が首に回った。袴を寛げて、腰を進める。すっかり準備のできた場所に、ず、ず、と押し入る。先端が入った途端から、後孔が金魚のようにパクパクと貪りだした。うねうねと脈動する内部は蛇の腹のようだ。
「イぁ…！あぁッ…んッ…は、はあっ…ァ！！」
開く。開く。目が開く。見下ろす輝く瞳には、星が映り込んでいた。星屑を閉じ込め

たような眼が、僕を映してうっそりと笑った。
妖刀ね。全く、これは大した魔性だよ。
「っハ…！！ァ…はあッ…ィ、い…ッ！いな、ほ…」
小刻みに腰が揺れて、両足と中がギュウギュウ締め付ける。首の後ろの腕の先。両手の爪が背中の肉に食い込んだ。潮が満ちる。
「イッ…いぃ…っ…あ、ぁ…！！」
「っあ…！」
虎落笛のように切ない呼吸を吐き出して、星は散る。どくどく、どく、と注いだものを媚肉が貪り飲み込んだ。痙攣する細い体を抱きしめる。息は熱いのに、肌は冴え冴えとした冷たさだった。
「…スレイン」
まだきゅんきゅんと可愛く震えるそこから抜き取り、仰向けの彼の横に肘をつく。目を細めて嗤う顔は、涙と涎でべとべとだ。
「綺麗にしてから帰ろうか」
物欲しそうに開いた赤い唇を舐めると、林檎飴の味がした。

Sword of blood

深紅の劒

R-18

海賊伊奈帆(17)×武器スレイン(18)

潮風を頬に受けて、伊奈帆は夜の帳を今か今かと待ち望む。水平線が赤く染まり、燃えるような夕日が形を失っていく。
焦れったい。早く闇が落ちないか。

――これは、夜しか使わないんだ。
どうして、と聞いたのは誰だったかな。多分、酒場の娼婦だろう。柄が機嫌悪そうにカチリと音を鳴らしたから。
――こいつはね。夜の血が好きなのさ。
その時ピリリと、触れた指先が痺れたのだ。

闇に浮かぶ海賊船。
水平線は闇に溶けて見えない。月明かりが海面を照らし、光の道が波間に揺れる。
黒い鞘。
宝石飾りのついた柄。
そこを触る。指に伝わる、冷たい鼓動。
さあ、夜が来た。
刃を抜く。

現れるのは、細く薄い両刃のブレイド。
星影の落ちる刃は真紅。
「スレイン」
伊奈帆は武器の名を呼んだ。
瞬間、巻き起こる風。
薔薇の香り。

「…ああ、いい月夜だ」

その渦の中心に現れたのは、漆黒の衣装に身を包んだ青年の姿。大きく伸びをして、胸いっぱいに息を吸う。
いつ見ても、派手な登場だ。
月色の髪を潮風に遊ばせて、赤い唇が無邪気に笑った。
「ドビュッシーが聞きたいくらい」
ふらふらと舳先に向かおうとするので、伊奈帆は肩を竦める。
「ねぇ、スレイン」
「何だ？」
「何か、ないの？」

久しぶりの邂逅だ。気まぐれなこの『生きた武器』は、凪いだ月夜にしか姿を変えない。月が欠けて満ちるくらいの間、肉声で言葉を交わしていない。
その割に、素っ気ない。
「ああ」
合点がいった、という相槌の後、鼻先に薔薇の芳香が香った。目を閉じるのが勿体なくて、長い睫毛や静脈の透ける瞼を左目に映して舌を吸う。
甘い味。熱くて柔らかな肉。
耳を痺れさせる吐息。
離した唇を、赤い舌で舐め目が瞬く。
そうして、けろりと笑った。
「拗ねるなよ、伊奈帆」
いつもこうだ。なんだかんだ、自分はこの妖刀に限りなく甘い。
「敵わないな、もう」
カンカン、カン、と煩すぎる合図。遮る物のない海面に、もう一つの船影。スレインが顎をしゃくった。
「狙いはあれか？」
「そう。調子は？」
薔薇の香りが強くなる。薄い腹をとんとん、と手の平で叩き、スレインは言った。

「腹ペコさ」
最高のコンディションだ。

薔薇の香りは、血に負けないのだな。
血の雨が降り続ける甲板。もう何人切ったろう。伊奈帆は手の中の武器が放つ香りに噎せ返りそうになりつつ、身を翻す合間、刀身の輝きを隻眼に映す。
鮮やかに赤い劔は血を浴び、それ自体が妖しい輝きを放っていた。
へばりついた血と脂が、一瞬後には消えてなくなる。真新な装飾刀のようになった刀が、敵の胴を別った瞬間また血を纏い、そして消える。
血を吸うのだ。この刀は。腹ペコというのは本当らしい。風を裂くほどの切れ味だ。
「なんか妬ける」
そんなに美味しそうな顔をして、刃を煌めかせて。
『馬鹿だな』
武器が笑って、ごくごくと血を吸った。
「後でさ、いい？」
翡翠のポンメルがきらりと光った。
『腹いっぱいになってからなら』

「よっし」
振り向きざまに、二人同時に首を飛ばす。

「ああ、疲れた」
屍だらけの敵船から退散する。靴の裏の血と脂が汚らしいけれど、仕方がないか。明日の掃除に思いを巡らせつつ船長室の扉を開ける。
「スレイン、着いたよ」
ぶわり、と部屋中の紙が巻き上がった。ああ、明日の掃除は骨が折れるな。しかし、食事の後はここでしか姿を見せたがらないし、仕方がない。
「伊奈帆…」
劔から人の形になったスレインは、足を震わせて膝をついた。紅潮した頬にべっとりと貼り付く人間の血。目が夜光虫のように青白く輝いて、白い八重歯を覗かせて喘いでいる。
「いっぱい食べたね」
食事の後は、いつもこうだ。飲み込んだ餌を体の中で捏ねる間。人間の形でなくては、血を消化してエナジィに組み替えられないのだ。
あれだけ食べたら、三日は戻れないだろうな。

「はあ、ぁ…伊奈…帆」
床に座りこんだ彼の顎を掬って、口の中を舌で蹂躙する。喘ぐ声と血の香りが聴覚と嗅覚を馬鹿にしていく。まさぐる肌はお互い血と肉でどろどろで、海水で塩っぽい。そんな状況にも興奮してしまうのは、この刀と契約を交わしてから。

『血を吸う剱？』
『持ち主だって切る吸血刀でさ。ただ、血を吸われない方法がありましてね。契約って言うんですが…』
あの商人、どこまで知っていたんだか。
『血の替わり…』
あそこをね、食い千切られますぜ。
『…馬鹿馬鹿しい。でも、切れ味は良さそうだ。貰っていくよ』

「どうして欲しい？スレイン」

「ふぇ…あ、…ァ」
急に口内を開放されて、半開きの唇から気の抜けた声が漏れた。目はウルウルと快楽の涙を湛えて、頬はピンク色。柳眉は困った、と言いたげに下がって、唇をきゅっと噛みしめている。
ええと。…ちょっと、これは破壊力がすごいな。理性の。
こんな顔、他の連中には絶対に見せられない。
おずおずと血色の唇が開いた。両手をついて、身を乗り出す眼下の人外者。
「伊奈帆…お前のは…」
爪の長い白い指がそこを撫で上げやわやわ揉んだ。上目遣いの碧の光彩に、欲の炎が灯って光った。
「…血よりも、こっちが美味しい」

「はァ…！ンッ…ああ、…アァッ…！」
ランプの光で影の濃い体は、発条のように何度も跳ね上がる。奥を突くと、口から嬌

声と涎が溢れ出た。
シーツは血と涎と、あと諸々の液体ででろでろだ。明日が洗濯日和の快晴であることを祈る。
「あっ…ア！ッあ…もっ…もっと…ッ！」
「…ここ？」
角度を変えてぐりぐりと押し込むと、びくんびくんと白い背中が震えた。陸に上げられ飛び魚のようだ。中もぐいぐい締め付けて、こっちもやばい。スレインの足が開いたり閉じたりして、シーツが寝台の上に山を作り始めた。
「ふぁっ…！あッ…あ！…そ、ソコ…も、…あ、んあッ！」
激しく腰を揺すって絶頂を追う孔から、半分ほど抜き取りぐるりと先端を内壁に押し付ける。ひっ、と喉が鳴った。いい声だ。涙が頬も首も胸も濡らして、どこを舐めてもしょっぱい味だ。
「はや…く…！…ッ…だ、…出し」
「まだだめ」
腰を下げる、その動きを察知して、彼の中がまだ、まだ、と誘った。名残惜しいが、まだ達するには惜しい。だって。
「いつぶりだと思ってる？」
そうそう簡単に終わらせてたまるか。こっちの我慢も限界だ。いつだって袖にして。

契約者だろうが。唯一無二の。
中身もないのにきゅうきゅうと動く孔は一先ず放置する。組み敷いた体の、足の指を頬ばる。音を立てて、爪の縁から指の間、筋の線と骨の継ぎ目を舐め回す。視界の中で彼の昂ぶりがてらてらと橙に光った。
膝の裏を堪能する。甘い悲鳴が上がると同時に両手が伸びてきたので、二つの手首をまとめてスレインの臍の上に押し付ける。指が身悶えして、尖った爪が肌を掻いた。
「はアッ、あ…っ、だっ…だぁっ…て、も…、もッ…う…！んあぁ…アアッ…！」
膝の裏を吸って擦ると、彼の先端から勢いよく迸った。もう、足の間は水溜まりのような量の液体が光っている。
「…またイッた。もう何回目？」
言いつつ、胸に右手を伸ばす。くすんだ桃色を親指と人差し指で捻じり、引っ張る。左手は、錠前のような臍の上で手首に鍵をかけたまま。腹がひくひくと痙攣した。
「はっ、はっ…あ、は、ァ…！うあっ…」
身を捩ろうとしているようだが、僕に両手と腹を戒められたままじゃ、首と足元くらいしか動かすことはできない。一番動かしたい腰回りをがっしり固定されているから、快楽の炎を逃がすこともできず焼かれ中から爛れている。膝で後孔を押してみると、孔は収縮し仰け反った喉から発せられた悲痛な声が尾を引いた。
伊奈帆は固く尖った色づきに爪を立てて揉みこんだ。細い足が腰に回って、蟷螂の両

刃のように穿つものを求めて締め付ける。
待て待て、早いって。
「どこがいいの？」
まあ、どこでもイイんだろうけど。
「あっ…や、やぁ…っ、も、はやくっ…」
腰が上下左右に悩ましく動く。今すぐ突っ込んで、思いっきり中に放ちたい。でも、もうちょっと。
「だめだって。ホラ、次はここ」
耳朶を抓んで引っ張った。急に解放された乳首がピン、と尖って、薄い胸が触れるものを探して上下する。耳に息を吹き込んで舌を入れると、背中の足が面白いくらいじたばたと動きまわった。
「ひっ…っあ、あ、ぁア…ンンッ！」
耳を味わいつつ、手を開放する。スレインの両手は自身の腹を掻き抱いて、腰骨をしっかと掴んだ。髪を振り乱して、涙ながらに懇願する。
「いっ…い、いな…ほッ…も、おねが…」
後ろに手を這わせると、中指がぬるりと飲み込まれた。食らいつくソコには刺激を与えず、耳を舐めて、噛んで、奥に進む。食い千切られそうなくらい、下が反応した。
「…とりあえず一回イこうか。ここでイけるでしょ？」

耳を容赦なく犯す。がくがくと全身が震えた。途絶えることのない享楽の声。
「あっ…！アッん！ンッ…！あ、ぁあ…！～～っァァ！」
今度は乾いたまま、スレインは達した。指と舌を引き抜く。涙と血に濡れた頬にキス。
「可愛いね」
「ふっ…は、…あ…ァ…い、いな…ほ…」
どんな目で見てくるか、と思ったが、予想外に弱々しく愛らしい眼差しだったので、伊奈帆は珍しく反省した。少しだけだけれど。
「ごめん、苛めすぎた？」
可愛いからさ、つい。
「お…ねがい…も、ほし…」
太腿を擦り合わせて、もじもじと目を逸らしている。正直最高に滾るが、駄目だ。ちゃんと言ってもらわないと。
全く。久しぶりなんだからな。
「何が欲しいのか、ちゃんと言って」
真っ赤になって。両手を胸の前で組んで。足はクロスさせて。そんな仕草に騙されないぞ。ちゃんと最後まで言って。
「…えっと…その、…伊奈帆の、…せ…」
「せ？」

散々喘いで善がって。今更、何を恥ずかしがるんだか。まあでも、その方が唆る。
「ほら、何が欲しいの。言って御覧」
悪戯くらいいいだろう。ぴんぴんしている突起を爪で弾く。すごい弾力。
「うっ…ぁン！あ、ちょ、だっ…め…いな…ほっ…！」
「もう一回、乳首でイく？」
両手が縋りついてきた。よし。もう一押し。そう思って、ぐりぐり、ぐりと指先でこねる。スレインが悲鳴を上げた。
「あっ…、ほし…ぃッ！精液、だっ、出して…っア…！」
「よく言えました」
そうとなれば、話は早い。準備が完全に出来上がって待ち構えている場所に、限界に近い自身を押し付ける。触れた瞬間から、襞が蠢き中へ誘われる。
奥にいくまで、もつかな。
中で大きさと固さを増すソレに、スレインが背を仰け反らせた。
「はぁンッ…！あ…あ、アァ…！っ…お、おっき…あッ！」
「…すご」
熱くて、濡れてて、狭くて、やばいくらい強い締め付け。スレインの足と腕が吐精を求めて伊奈帆の背中と腰をを揺すった。
「あっ…はあっ…！アァあ！っく、あっ、まっ…ン！まだ…っ？」

「…勿体ない、だろ…っ」
とは言いつつ、もたなそう。だって、善すぎる。
ピストンが速く深くなり、挟み込む肉も熱く吸い付き狭くなる。
精と血の臭い。それと、薔薇の香り。
キンと冷たい快感。
刃のような肌の輝き。
人とは思えぬ、魔性の声。
「あっ、…い、イイっ…！ぁあ、で、出てきてる…ンっ…ア！」
中の様子を逐一報告しなくていいから。…てか、分かるのか？
ああ、笑ってる。
笑った顔が、なんでそんなに綺麗なんだか。
「…出すよ」
スレインはコクコクと激しく頷き、白い咽喉が弓のように反った。彼の足も手も、指が関節の限界まで折れ曲がる。
「ぁあ、アアアッ…！ぁあー…ッ！」
「ぅあ、…ッ！」
中身が空になる。出る先から飲み込まれる。
食われる。

食われる。
食われた。
…ああ、そう。…もう空っぽだ。
「スレイン…？」
抜き取り、顔を覗き込む。瞬きを繰り返す目が、緩慢に伊奈帆を映し細まった。荒い呼吸。白い胸が上下する。
「はッ…あ、はあ、あ、…い、いなほ…」
下の口がはくはくと蠢いて、溢れた白濁を飲み込んでいる。そのうち、足の間も全部綺麗になるだろう。
「…美味しい？」
枕に金の髪を沈めて、にっこりと笑う吸血鬼。
「…はい。とっても」
またしばらく、お預けだ。毎日満月ならいいのに。

Arms of a pirate

R-18

Dagger

Pistol

Saber

Lance

...and

海賊伊奈帆×武器スレイン

ダガー【灰服】

銃とサーベル【青服・囚人】

聖槍【伯爵】

グングニル【姉姫の聖槍】

レーヴァテイン【妹姫の短剣】

美しい武器【海賊×聖槍】

武器の所有と使用に関する一海賊の書留について【伊奈帆×スレイン】

ダガー

伊奈帆×灰服スレイン

15「だからさ、無理があるんだって」
20「そんなことはない。いける」
15「根拠は？」
20「前にしたとき、余裕があった」
15「君が下手なんじゃないの」
20「君が早いだけだろう」
スレインは寝転んで目の前で繰り広げられる舌戦を聞き流していた。適度に運動して、夜ももう遅い。眠気が勝って欠伸が出た。
15「スレイン、寝ないでね」
伊奈帆が釘を刺した。
20「寝ても、そのまま続けるから」
伊奈帆が不吉な宣告をした。
ベッドの上で伊奈帆と伊奈帆に挟まれて数十分。前戯の後に始まった喧々諤々は、いくらなんでも長すぎる。熱も引いた。待ちくたびれてもう眠い。クッションを引き寄

せ抱え込むと瞼が下がった。
もうムリ。
やや早口の応酬をバックミュージックに、スレインは意識を手放した。

同一人物が二人。このとんでもなくややこしい状況の発端は魔が差した。それに尽きる。
スレインは人ではない。古い廃城の宝物庫に埃を被り蜘蛛の巣を纏わせ転がっていた短剣だ。人の手に握られ身を血で染めたのは遥か遠い昔。この城から人間が消え、城壁が苔生し、茨が尖塔を覆い天を突くほどの年月、スレインは命ある武器としてひっそりと眠りについていた。武器なのに生きている、というよりは種族の違う生命体が人に近しく造形された、という方が説明としてしっくりくる。スレインが産まれたのは海に近い洞窟の岩盤の中だった。鉱物としてこの世に形を成し、世界を形作る一片としてひっそりと生命を繋いでいた。まだ今のような思考も感情もなく、あるのはただそこにいた、という記憶だけ。
ある日人が現れ削り出された。それまで岩石に覆われていた体が、違う色をしていることを知った。光に透ける薄い翡翠色。そして気が付いたら今の姿に誂えられていたのだ。

武器職人の腕前か何か別の理由か、スレインは熱い叩き台の上で武器になった自己を認識した。そこから知覚が生まれ、思考が育ち、感情を表す術を得た。そうして思う。
自分は、何のために生み出されたのだろうか。
作り主は「武器は美だ」と言った。
一人目の使い手は「武器は道具だ」と。彼は僕を手から離し死んだ。
二人目は「武器は裏切らない」と。彼は僕を胸に刺され死んだ。
三人目は「武器は身を守る鎧」と言って、最後は僕を捨てて絹を身に纏った。
長い年月が流れた。何も起こらず、ただいた。時々、僕を使った人間たちのことを夢に見つつ。
そして四人目。僕を手に持ち目覚めさせたのは、一人の人間。それが伊奈帆。

15「ちょっとスレイン、起きて」
目を開けると、両眼揃った童顔の伊奈帆の顔が至近距離にあった。
20「そのままでもいいけど。その方が無理なく入るかも」
またしても不穏なことを口走ったのは。眼帯をした隻眼の伊奈帆。ややこしい。
…いつの間に、こんな体勢に。
15「スレイン、もうちょっと腰上げて」

四つん這いの背後に僕より背の高い伊奈帆が陣取っていた。べたべた尻やら腰やらを撫で回して、こいつは本当にしょうがないやつだ。変に抵抗すると面白がってしつこいし、抵抗しなくても口喧しくあれやこれやと人の身体を解説して。腹も立つが、仕方がない。僕のような生命を宿す武器は（他の武器にお目にかかったことは無いが）、普通の武器にはない能力が付与されている。僕の場合は時間について。少し先の未来を見ることができるのと、使用者の時を少しばかり操作することができるのだ。例えば、普通の人間の五倍の速度を付与する、数時間程度、使用者の時を堰き止めるなど。そのお陰で伊奈帆は、戦闘では負けなしだ。僕を手に入れる前から負けなしだそうだから、どのくらいが僕の成果かは知らないが。

その力を使うのは勿論ただではない。髪とか目とか血とか…要するに使用者の体の一部を人の形で取り込み、体内にエネルギーを蓄える必要がある。手段は色々あるのだけれど、手軽で手っ取り早いのが性交。だから、僕にとっては人間で言う所の食事の時間になるわけだけれど。

20「口、開いて」

両眼の伊奈帆が僕の顎を持ち上げた。にや、舌を舐める表情が生意気だ。

どうして使用者が増えて、しかもちょっと縮んだのと大きくなったの、その二人に前から後ろから迫られているのかと言うと、本当にこれは思ってもみないことで、魔が差した。それだけなんだ。

事の発端を想起する。
そう、二人並んで甲板で星を見ていた。これだけ聞くとロマンチックなシチュエーションだと思う。言葉と言うのは便利なものだ。
17「ヤろう」
「ヤりません」
17「なんで」
「気分じゃないから」
話している内容は下世話な事この上なかった。僕の食事と彼の性欲処理が同時に終わる、一石二鳥の提案ではある。
「腹が減っていない」
17「四時間前もそう言った」
仕事がなければ暇だ。動かなければ腹も減らない。この数日において船の上は平穏すぎて、日の出を、朝日を、晴天を夕焼けを、そして星空を見る事くらいしかやることがない。暇だった。お互い。そうなると後はベッドの上やらソファの上、気が向いた時に相手を求めるくらいしかやることはなくて。馬鹿みたいにそこら中に裸で寝転がっていたのだが。

「いい加減、飽きました」
17「何だって？」
あ、と思った時には遅かった。伊奈帆がずいと僕との距離を詰めてすごい顔で睨んでいる。こんな顔もできるのか…。
「いくらなんでも、それはないだろ？僕に飽きた？怒るよ」
…もう、怒ってるくせに。
僕は養分の過剰摂取に辟易している、と言いたかっただけなのだが、都合悪く解釈された可能性が高い。
「今日だけで、もう何回目です？数える頭はありますか？」
しかしどうも謝るとか下手に出る気にはなれなくて、売り言葉に買い言葉。
17「嫌だって言いたいの？」
「嫌ではないです」
嫌ではないが、もう少し時間が欲しい。
17「要するに、お腹が空いたらいいんでしょ？」
伊奈帆が怒り眉で何か言った。
「まあ、そうですけど」
17「何か、僕に力を使ってみてよ」
理には適っている。意図は分からないが。

「いいですけど、どういう？」
17「君好みにしてみて」
「好み…」
時間を操るには、制約も多い。し、自分でも知らない領域がある。最低限のことだけ説明すると刃に使用者の血が必要とか、肉体の劣化を緩やかにするためには使用後のメンテナンスでお互いを回復させる必要があるとか。
どうしよう。暇みたいだし、煩いし、僕はしたくないし、とりあえず時を止めてみるか。
と思って、身体の要素を作り変える。青白い光に伊奈帆が手を伸ばした。彼の右手が僕の柄を掴む。左手が両刃を握る。血が滴った。
伊奈帆に使われるのは悪くない。でも、もう少し何というか。聞きわけが良かったらいいのに。武器と人とは言え、一応向こうが年下なんだから。あと、身長のことでぐちぐち言うのをやめてほしい。うーん、同じくらいの年だから、だろうか。喧嘩になるのは。年上か年下なら違ったかな。
…と余計なことを考えた。
20「あれ？」
15「あれ？」
『…あれ？』

何か変だ。柄を握る手が二つ。両手で持っているんじゃない。だから変だ。肌触りの違う右手と右手だ。
15「誰？」
聞き覚えのある、聞き馴染みのない声。伊奈帆だけど、伊奈帆じゃない。
20「…多分、僕だと思うけど」
こちらもいつもと少し違う。
『…伊奈帆が二人？』
急に腹が減った。

「ふ、…っン、は…」
15「もっと、奥、まで飲み込んで」
頭の上から、煩いやつ。でも、案外気分がいい。声に分かりやすく熱が混じっている。いつもより少しつるりと柔らかいソレを咥内に味わう。張り出した形を舌でなぞり穴をぐりぐり舌先で擦ると、先から苦いのが溢れてきた。じくじくと滲む体液を下顎に集めて飲み下す。
ご…くん。
20「そっちだけで盛り上がるなって」

「あッ…ぁ…！」
指がイイところに中って背が跳ねた。背後で薄ら笑いが聞こえる。こいつ、性格悪いな。図体も大きいし、かわいくない。
20「きゅうきゅうしてるよ。もう欲しいの？」
内壁を抉る指は、いつも飲み込んでいるものより皮膚ががさついて骨格が出っ張っている。慣れた刺激の違和感に内部の熱が高まる。
15「…ちょっと、煩いから静かにしてよ」
20「顔が赤い」
15「ぶん殴りたいな…」
20「いいけど、自分だよ」
前と後ろで交わされる不毛な会話は無視して、ひとまず僕は口の中のモノを片付けることにする。脈動が頬肉を震わせ、先走りの量が増えてきた。美味しい。通り抜けた喉の奥が腹の中が灼ける。度数の高いアルコールを摂取したような熱さと酩酊を感じた。
「ひんっ…！」
ずるりと後孔から指が引き抜かれた。急に空になった場所が浅ましく数度痙攣する。そこにざらりとした舌の感触。ぞくぞくと背が粟立った。
20「準備はもういいよね」
確認と言うより、煽るためだろう。楽しくて仕方がないという声と同時に押し付け

られた熱いモノを、下の口がはくはくと性急に飲み込むのが分かった。圧迫感と全て見られている恥ずかしさで、ナカが勝手に締め付けを始めようとする。堪えようと息を詰めると、後ろからまた苦笑。でも今度のは、その中に熱っぽい欲が混じっていた。

15「スレイン」

髪に指が通った。後ろで感じたより少し小さな手が、髪を梳いてやんわり頭を股座へ押した。僕の口の中ももう大きくなった欲望で一杯で、早く肉棒に張り詰めたご馳走にありつきたくて仕方がない。裏筋をべろりと舐め上げて、舌裏を亀頭に捻じ込む。竿の中ほどに歯を軽く当て吸い上げると、ぶるぶる、と伊奈帆が震えた。

「っあ…！」

びゅくびゅく、びゅびゅ、…ぴゅ。残さず喉で受け止めて、ごく、ごくりと何度も飲み下す。腹がくう、と鳴いた。最初に感じていたひどい空腹と眠気は、随分ましになってきた。ほっとして息を吐くと、待っていたかのように後ろの中身が大きく前後した。

ごり。ぐ。

「ヒッ…！」

20「やっと終わった。待ってたんだから」

いつの間にこんなに奥まで到達していたのか、内臓がみしりと音を立てた。入り口はもうでろでろで、抽挿の度ぐぷ、ぬぷ、と卑猥な音を立てる。硬くていつもよりほんの少し質量のある陰茎に媚肉が吸い付く。形の細部を孔の神経が探りだす。皺の数と脈

の速さ少し違う。でもまぎれもない伊奈帆の形。
「っあ！は、あ…ア、ア…！！」
20「ナカ、すごい熱い」
「は、…は、アッ！…ああ…！」
ぐい。
「ふぇ…？」
涙の膜の向こうに、つり上がった橙が二つ。丸みを帯びた頬が不機嫌に歪んだ。
15「…腹立つな、あいつ」
「…ぇ…っと…っふ」
…お前なんだけど。あれ。
15「キスするから」
「へ…？」
がし、と記憶よりも滑らかな手のひらに顔を挟まれ口を口で塞がれて、唇が角度を変えて何度も重なる。舌が行き来する度、溢れた唾液が口の端から顎を伝った。
「んっ…く、ぅ…！う…！」
後ろを太くて大きなモノで掻き混ぜられて、口の中に熱いぬめりが奥へ奥へ侵入してくる。くらくらして、頭に霧がかかったみたいに感覚が上擦ってきた。後ろの口と前の口が蕩けてゆるゆるだ。伊奈帆の四葉の手のひらが触れた場所が鋭敏に筋肉と骨の形

を感じ取る。すごく熱い。焼けるようだ。
20「待ってあげたんだから、邪魔しないで」
15「…」
年下の伊奈帆は返事をしないで、僕の舌をしつこく吸う。ざらついた味蕾は苦い。唾液が口の端からまた垂れた。溢すなんて勿体ない、とはしたなくも思う。だって、美味しいのに。
20「スレイン、こっち」
電流のような刺激が背筋を駆け上がった。彼を咥え込んだ尻が勝手に揺れて、伊奈帆の腰骨を握る手の力が強まった。
「…っん！ん、んん――！」
20「奥もトロトロだよ」
いつの間にか昂ってシーツに溜まりを作っていたソコを、濡れた手で握って擦られる。自分の出した体液で愛撫される羞恥に、後ろがぎゅう、と反応した。
15「…あんた、いい加減にしてくれる？」
20「やっかみ？」
15「僕だって挿れたい」
「ンぁ！ああっ…！」
腰を打ち付けナカを大きく抉られた。握られた場所はひくひく震えて今にも栓が抜

けそうだ。
20「挿れたら？最初からそう言ってるじゃないか」
……は？
飛びそうな意識の中で伊奈帆の言葉を反芻する。……え？それってつまり…。
待て待て、ちょっと待て…！
「あっ…！も、ぎちぎち、だから…っ！…ッア！そ…むり…っ」
腹の中でぐるりと伊奈帆が周回した。自分のものとは思えない声が鼓膜を揺らす。
20「まだ余裕ある。いけるって」
「そ、っ…あ…！…い、いな…」
さっきは反対していた。一縷の望みをかけて、眼前の伊奈帆の両目を見上げる。
15「…」
…なんで黙ってる？
「あ…ぅ、うあ、あっ…！」
急に後ろに引き寄せられて眩暈が視界に星を散らした。隻眼の伊奈帆の胸板の厚みと熱さを背に感じ、伊奈帆の上目遣いを見下ろす。
20「君が下になって。上から降ろすから」
人を何だと…。
15「…分かった」

いや、そうじゃないだろう。…え？本当に？
「い、や…、ま…って…待てって…！」
20「大丈夫だから」
だから何が⁉
「ふた、り…ぶ…な…て…ッ！む、むり…っ！」
15「いけるって」
っ…おい！それを言ったのはお前じゃないだろうが。こんな時だけ意気投合するな。さっきまであんなに仲が悪かったくせに…。
口を尖らせて若干不満げに寝そべった伊奈帆の屹立は、さっき出したばかりなのにもう反り立っていた。迎え入れることを想像して体内の質量のきつさに膝ががく、と震える。訪れる快楽への期待に浅ましく吐息が漏れた。後ろの伊奈帆と接合したまま彼の上に跨る。知性に澄んだ、少し熱っぽい橙。見下ろす幼い顔からは僕らの痴態が丸見えなんだと殊更意識させられて、鼓動が早鐘を鳴らす。
ぐい。
「ひんっ！」
20「かわいい声」
膝裏を抱えられて、後ろの伊奈帆に乗せられた。ぐりぐり、とさっきまでと違う場所に何度も熱いモノが擦り付けられる。動物のマーキングみたいだ。ああ、人間は動物

だったか。
てらてらと濡れる硬さの先を目指して、肉と肉の隙間をあてがう。でも上手くいかない。
「ふ…は、はあ、…あ、っ…！」
15「っく、…っ！ん…っ！！」
20「…もう少し、右かな」
っ…だから、そういう問題じゃ、ない。くそ…だから言ったんだ、もう入る余地なんてないんだって。
15「…っ、こ、これ、ちょっと無理じゃない？」
後ろが止まった。逡巡する気配。…嫌な予感がする。
20「…僕は一度抜くから」
え？
15「分かった」
…何が？
「っ…ぁン！」
ずる、と硬さを保ったまま唐突に引き抜かれ、腰がひとりでに激しく揺れる。穿つものを求めて暴れる腰を下の伊奈帆にはし、と掴まれて、引き寄せられるままに降りていく。

あたった。濡れてて、すごく熱い。ぶる、と背が震え後ろの伊奈帆がその背を支えた。

「あ…あ、あっ…い、いな…」

15「っ…すごい、熱い」

さっきのより、少し細くて真っすぐで硬い。おずおず、といった調子で中を探られる。

「あああっ…！あ、はあっ…あ、あぁ…っ！！」

今までとは違う質感と動きに、籠った熱がもう一度とぐろを巻いて体中の神経を駆け巡る。もう前からは止めどなしに白濁が流れ続けていて、伊奈帆の腹の凹みに添って線を描いていた。

15「…は、…っ…スレイン」

このままイキそう、と思った途端、尻を掬われて強引に引き抜かれる。

20「次は僕の番」

体重で簡単に杭が沈む。

「イ…！あ、アァ…！は、アッ…！」

大きい。張り出した場所が滲んだ体液をこそげるようにピストンする。次々に違うモノでナカを暴かれて、もう何が何だか分からない。無意識に首を振ると、後ろから前髪を掻き上げられた。開けた視界の中には、息の荒い伊奈帆の不満顔。

15「いいとこ…だったんだから。邪魔しないでよ」
20「順番だって…。惜しいけど、交代するから」
　また抜かれて、また挿れられる。次第に間隔は短く、何度も繰り返されるそれ。頭が沸騰して、顔は汗なのか涎なのか涙なのかわからないもので覆われ伊奈帆がそれを舌で拭う。胸の尖りが前から後ろから、大きさと硬さの違う指に撫でられ弾かれ引っ張られる。
「は…、はぁ…ーっ…あ、ぁ…」
　ぐらついた頭を後ろで伊奈帆の肩が受け止めた。硬い筋肉の感触を後頭部に感じ、耳の横に籠った速い呼吸を感じる。耳から犯されているように心地良い。
20「…もう…いいかな。スレイン、いい？」
　…何か聞かれているけど、返事が上手くできない。もう、早く、早く。それしか考えられない。
15「…挿れるよ」
「っ！！…ぅあ！……か…、あぁっ！！…アア！！」
　ぎちぎちと音が頭蓋に響き、肉が悲鳴を上げる。欲しがる内部と、両者を迎えるには狭すぎる入り口。奥が震えて形を想うのに、入ってこないもどかしさ。気が触れそうな二律背反に、手と足は欲望に反して逃れようと暴れ出す。その手を下から挿れた伊奈帆が握った。指の間を指で割り、ぎゅう、と握られた手の温度。思い通りに動かない体

が手を押しても、受け止めてくれた。大きく息を吸って吐く。入り口がまた押し広げられる。前に後ろにずらしながら無理のないように少しずつ。その圧迫感はとてつもないが、もう痛くはない。

20「…っ。…挿入ってきてる、…大丈夫」

伊奈帆が僕の胸と腹を腕に抱いた。背中の鼓動と肌の温度にまた少しそこが広がる。もうすぐ。もうすぐ全部。手と腕から、そして繋がりつつある場所から、伊奈帆たちの欲と熱さと人のにおいを感じ取る。

人間の温度。

15「っあ…!あ、挿入…った…、ぜんぶ…っ!」

ほう…と息を吐いたのは僕と背中の伊奈帆。膨らんだ風船みたいにパンパンで、張り詰めて、割れそうにきつくって。苦しいけど、すごく。

いっぱいだ。うまった。なかにある。はいってる。

20「動くよ、大丈夫?」

がくんがくんと首を揺らす。もう重力と彼らに身を任せることくらいしかできない。硬い。苦しい。擦れて痛い。でも、すごく、すごく気持ちいい。

「――――ッァア…!!!…あ、ァ、ァ…!」

違う速度で出し入れされて、体が混乱する。どっちがどっちなのか、中も外もわからなくなる。僕の手を握るのは伊奈帆。僕の体を引き寄せるのは伊奈帆。伊奈帆。…伊

奈帆。
「アー…ッ、あぁア！」
15「うっ…でる…っ！出すよ…」
がん、がん、がん。今まで感じたことのない重さで、同時に奥に何度もぶつかる。深く、深く、…ああ、もうそこ。
20「…スレイン」
ひとしずく。背に。
「ァあ、アア――――ッ！！」
熱い飛沫が波となって言葉と思考を攫い、時を止める。スレインはままならない五感と精一杯の呼吸の最中、意識を手放す直前の聴覚が首の後ろの独り言を拾った。
20「――――…てる」
さっきぽたりと背に落ちた一滴が涎でも汗でもないと分かったのは、声が震えていたからだ。

スレインが次に瞼を開いた時、星空は夕焼けに変わっていた。
起き上がろうとするが失敗に終わった。体中が錆びたブリキになってしまったようにぎこちない。視線で室内を見渡すと、伊奈帆がデスクから立ち上がるのが見えた。その

まま近づいてくる。
「…伊奈帆？」
「…戻ったみたい」
伊奈帆一人だ。よく知っている、僕を拾った十七歳の海賊船長。
「変な感じだよ」
珍しく困惑を顔に書いて二の句がつげないようだ。疲れてはいるが気が晴れた。
「あれは伊奈帆だったんですか？」
「多分ね。今ではよく分からない」
ベッドに腰かけ、伊奈帆は顎に手を当て左上を見上げた。木目の天井以外は何もない。
「前からも後ろからも、全部覚えてるけど」
さっき晴れた気が一気に曇った。
「すぐに忘れてください」
「嫌だ。勿体ない」
腹に拳の一つでも入れたかったが、腕が上がらないからやめた。

また星空だ。
あの騒動から数日後、伊奈帆はスレインと並んで舷墻に凭れて夜空を見ていた。月は

爪のように細い。スレインと出会った一年前の夜空が頭の中を通り過ぎた。
「あれって本当？」
スレインが顔を向けた。赤い襟、ポンメルの輝き。灰色の服、柄の光沢。髪の色、鍔の意匠。そして翡翠の目。澄み渡る刀身の鋭さ。
力を使うリスクの話。スレインはかつて、錆びつくから使えと。そうしないと、武器であることを忘れてしまうと。代償は空腹だから安心しろと。そう言った。
「嘘ついて、どうするんですか」
もう言葉はなかった。スレインは目でおやすみを言って武器に形を変える。伊奈帆は青い光が収まる前に柄を掴み自分に引き寄せた。手の中の刃のかたちを目で辿る。
しなやかな若木のような刀身は透き通った泉のような翠緑。柄は黒灰の銀。鍔は金に赤の宝玉。月に向けて掲げてみた。爪月でも、光は朧に白くスレインを照らした。
月光を透かすこの刃の色は、日に日に薄くなるようだ。

『貴方は、武器をどう使いますか』
『相棒かな』
一年前、そう答えた。
「武器は相棒。か」

フロックコートをはだけた腰巻の内側。仕舞い込んだ誂え鞘にスレインを仕舞う。柄の宝石飾りをひと撫で。この赤い色は血の色か。それとも。

波音が耳を貝の殻にする。うおんうおんと頭蓋を揺らす。

決めたことだ。迷わない。

僕は人だ。そしてスレインは武器。

だからその力を使う。おそらく彼の命の輝きと重さを削る魔性の力を。いつか刀身が透明になり、スレインが人のかたちを失ったとしても。

「君は僕の武器なんだ」

僕が先に死ぬとか。君が壊れる前に僕がいなくなるとか。そんなことは絶対にない。だから安心して戦い、そして殺せばいい。僕の敵を。

もしも壊れたら、砕けた君の欠片を拾い集めて。また君と出会おう。

…Continued to "a pistol and a saber"

銃とサーベル

伊奈帆×青服スレイン×囚人スレイン

ああ、また始まった。
「何ですか、さっきの。危うく手首が落ちるところでしたよ」
「煩い。お前こそ、もっと的確に狙え。無駄撃ちするな」
帰ってからやってほしい。
敵船の襲撃に船長自ら出陣したのが半刻ほど前のこと。あっと言う間に殲滅させた血の海の甲板で、忙しく動き回る船員を余所に険悪なムードを醸す一帯。
伊奈帆の前には、二人の男。顔立ちはそっくりだが、表情と服装は随分違う。
「当てるために外すこともあります」
そう言うのは、十六歳くらいの青い軍装の少年。大きな猫目と金の髪。今は眉を釣り上げているが、普段は気弱そうな表情が目立つ。子どもと大人の境目の、華奢で直線的な体つき。
「言い訳がましい奴」
鼻を鳴らすのは、年嵩の青年。髪と目の色は同じだが、服は粗末な薄青の上下。厭世的な表情で、時々舌を鳴らしている。大人の男にしては細く不健康な体で、姿勢も悪い。

剥き出しの肌に浮かぶ血管は病的にも、扇情的にも見える。
「喧嘩は後にしない？」
きっ、と四つの眼球が一つの眼球に注がれた。同じ目つきと色が四つ。これは迫力あるな。
「伊奈帆さん、この人に言ってやって下さい」
「おい界塚。お前、こいつの肩を持つのか？」
うーん、困った。僕にはどちらも必要だし、どちらも大切なんだけど。
「なんでそんなに仲悪いの？スレイン」
二人のスレインは同時に言い放つ。
「殺す時、煩いのが嫌だ」
「殺す時、血で臭いのが嫌です」
息ぴったり。仲、悪くないんじゃないか？
「銃は、音が出るものだしな」
青服のスレインがぱあっと表情を明るくさせた。
「サーバルは、肉を断つから血が出るし」
青年のスレインが、口角を上げた。
「どちらも、僕の武器だしね」
「うわ…」

「ふえっ」
右腕と左腕で、二つの武器と肩を組む。右からは硝煙の。左からは血の臭い。
「あの…」
「…おい」
「うん、いいね。戦の臭い」
これが、両手に花ってやつだな。有り体に言うと、最高。
「船に帰ったら、みんなで一緒にお風呂に入ろう」
左右の赤い頬に満足して、伊奈帆は武器を抱えて舫綱に飛び乗った。

「ンあっ…！あ、ア…ッ…！」
「…っ煩いな」
その口、塞いでやろうか、と白い唇が白い唇を塞いだ。
よく考えたら、すごい状況だな…。
「んッ…〜〜ン！ふ…ッ…ッ！！」
銃が本性のスレインが後孔のピストンで沸騰する快楽にのたうち回って体を揺らして

いる。背中が何度もマットレスを軋ませ跳ね上がり、首を振り乱して嬌声を上げる。
その涎塗れの口を塞いだのは、刀の方のスレイン。銃の頭上に膝をついて、逆さの顔向きで濃厚な口付けを交わしている。同じ色の髪が絡んで、同じ色の目が並んで、浮き出た色味の少し違う肌が密着して。
すごくいい光景…どっちも羨ましい。僕がしたいんだけど。それ。
「ひッ…!!んああッ…!あァっ…!」
するすると伸びた白い腕が、顎から首へ、脇を撫でて胸の突起をつまんだ。指の肌と爪でねじねじと抓られ、足がじたばたとシーツを蹴り、中がきゅんきゅんと反応する。熱くて、強く弱く、不規則に食らいつくそこ。暴れる足を両手で掴んで、肩に掛けた。密着した腰をさらに進める。銃の、じくじくと先走りを続ける場所が伊奈帆の腹に当たった。悲鳴のような声が喉笛から聞こえた。
「…ここ、いいんだろ？」
刀が銃の固く尖ったピンクの乳首をピン、と爪で弾いた。銃の腰ががくがくと震え、足が首を絞めつける。背骨の上で、足の爪がきゅっと丸まったのが分かった。
再び刀が銃の口に舌を捻じ込む。白く光る手が少し小さい白く硬い手をぐい、とシーツに縫い付けた。
「んンっ…!…っん～…～ッ…!」
ぷは、と大きく息を吸う音がして、刀が屈みこんだまま上目で僕を見た。その向こう

の腰が悩まし気に揺れている。口から伸びた銀糸がぷつりと切れた。
「…なあ、界塚」
まだ？と目が言った。
それ、クるから。
銃の奥を何度も抉る。接合部分からぽたぽたと雫が落ちて、シーツに染みが次々できた。アーチのように背が反って、大きな碧の目がまん丸く見開いた。ぼろぼろと溢れる涙を、刀の舌が舐め取った。
「うあ、アッ…！あ、…ア…ッ！ああア…！ァあっ…！！」
硬く細い直線的な胴体で何度もスプリングを軋ませて、銃は熱いものを吐き出した。
はあはあと戦慄く唇にキスをする。小さな尖った顎の輪郭を指で伝うと、長い睫毛が水を湛えた。
「ふ…ぇ」
「可愛いね」
「…煩いだけだ、こんなの」

「…伊奈帆」
刀が髪を掻き上げ名前を呼んだ。こういうの困る。突然の名前呼び。ちらりと見えた

耳朶に食らいつきたい衝動に駆られる。
彼はそろそろと近寄り胡坐を掻いた僕の腰の上に跨った。膝を立てて、細い指を絡めてそこにあてがう。
「うわ、ちょ、いきなり？ちょっと待って」
イッたばかりだし。
刀が悪そうに口角を上げ、赤い舌で唇を舐めた。不思議なんだけど、どうしてそんなに美味しそうに光るかな。唇。
「待てない」
腰を前へ後ろへスライドさせ始める。肉が擦れる度水音がくちくちと耳に響いた。挟んだまま太腿を擦り合わせて、何とも言えない絶妙の腰使いで揺さぶってくる。
「ちょ、やばいって…」
「…いいくせに…ッ…」
硬さを取り戻して張り詰めるそこに、細すぎる腰がゆらゆら下りていく。ぎゅう、と入り口が伸縮して、ぐいぐいと奥に飲み込む。
「…っ！…ハ……ぁ…」
銃とは違う、刀の中。じっとりと濡れていて、吸い付く内壁の温度は熱くない。馴染む温度とうねる欲。はち切れそうに大きくなっていくのが分かる。
「…うわ、中すご…」

「…ずるいですよ」
銃が身を起こして、猫目を吊り上げている。刀が顎を上げて振り向いた。ここからは見えないけど、きっと凄絶な流し目を送っているはず。
くそう、どっちも羨ましい。火花を散らすその視線の間にいたい。
「…こっちのセリフ…っ…先に楽しんだろ…」
「あなたが、途中でちょっかい出すから…」
「よ、かった、くせに…」
銃が刀の背後に寄って、手の平が胸の上にひたと乗った。鎖骨の窪みや首筋の凹凸、胸骨の影を華奢で固い指がなぞって押していく。
「…は…ンぁ…っ」
甘すぎる声が大きく漏れて、刀は目元を赤くした。銃が刀の肌に爪を立てて、首の後ろで囁く。
「声、出てますよ。人のこと言えます？」
「…こいつ…っ…！…ァ…ン！」
銃が敏感な場所をこねくり回すと、刀の喉が仰け反り白く光った。その白い首に吸い付く。背中がビンと伸びて、熟れた中がすごい動きと勢いで締まった。うわ、出そう。
「アああっ…！ァ…！」
いつものクールな表情からは想像できない乱れっぷりに、こっちもどんどん速度が上

がる。ふと顔を上げると、物欲しそうな顔をした銃と目が合った。
「…おいで、ここ」
「はいっ」
嬉しそうに歯を見せて笑い、銃が伊奈帆と刀と間に体を滑り込ませた。繋がった部分の真上に、ひくひくする部分が当たって喘ぐ声が二つに増えた。
「や…ァ！ふ…ァ、アッ…！！」
「…ッ…あ！アア！…あ、あ、…ァ！…いっ…！」
硬く熱い銃身と、撓る濡れた刃の抱き心地を同時に感じて、こう思う。
やっぱり、どっちも大好きだ。

二つの武器を両腕に抱いて、界塚伊奈帆は笑った。

…Continued to "the holy lance"

聖槍

伊奈帆×伯爵スレイン

僕は朝焼けの色を知らない。

靴音。大理石の床を細く高い踵が錫杖のように打ち付ける。速度はゆったりそして軽やかに。彼女が扉を開く瞬間を、千年の孤独に枯れた菩提樹のように待ち焦がれる。覚えているのは僕に触れる柔く白い手。見下ろす温度を持った宝石のような瞳。編みあげた長く美しい髪の後れ毛と、そして。

ぎぃ、と蝶番が鳴いた。

「スレイン」

僕の名を呼ぶ優しい声。

壁に固定されていた体が、呼名をきっかけに枷から外れ宙に浮く。冷たい温度の刃に生命の息吹が吹き込まれる。かたちが変化する過程のこの身が発する光の中で喜びに胸が高鳴る。嬉しい。幸せだ。こうしてまた彼女に使ってもらえるのは。

手だ。足だ。胸に腹、背中。人の形。骨は固くて、肉は柔い。そして、血は温かい。

耳が彼女の声をより鮮明に。鼻が彼女の香りを。目が、彼女の姿かたちを。僕が知る

限りでこの世界でもっとも美しい人の形を映し出す。
僕の女神。僕の持ち主。僕の世界。僕の全て。
人の形で跪き、首を垂れる。冷たい床の温度と、彼女の呼吸。歓喜で心臓の場所に当てた指が震えた。
「アセイラム姫様。ご機嫌麗しゅう」
「貴方も。スレイン」
差し出された右手。力を込めるとすぐに破れ壊れる最も繊細な人の箇所。畏れ多くこの手に戴き、甲と爪に唇を落とす。温かい温度と滑らかな感触。幸福感に満たされ、人のように鼓動が高鳴る。
白いドレスの裾が踊り、彼女は僕に背を向け歩き出す。開いた扉から差し込む光が彼女の黒い分身を床に縫い留め閉じ込めた。彼女の一部である美しい影を踏まぬよう、少し離れて付き従う。扉の前で振り返り、アセイラム姫は笑った。
「今日はいい天気ですよ」
「そうですね」
極小の窓から差し込み影を生む赤。きっと空は燃えるような夕焼けだ。
僕は武器として生を受けた。しかし、戦ったことは無い。肉を切ったことも、骨を断っ

たことも、血を浴びたこともない。
神槍。
神殿の塔の天辺が僕の牢獄。武器の形で鎖に繋がれ壁に貼り付き、天空の内側に囚われた生きた武器。どのくらい長いこと、ここにいるかは知らない。気が付いたら鎖の温度を感じていたから。
武器として生まれ、戦いを知らず。命あるものとして生まれ、空を仰ぐこともできず。それを不幸だと思ったことは無い。むしろ、なんという幸運かと打ち震える。彼女に会えるから。彼女に使ってもらえるから。それだけで、この生を百万回繰り返しても足りないくらい僕は満たされている。
アセイラム姫と出会ったのは、あの方がまだ小さな子どもだった頃。彼女が扉を開くその時まで、僕はこの世に音と光があることを知らなかった。
重い扉をこじ開けて顔を覗かせた少女の生命は驚きと好奇心で輝いていて。僕は世界を知った。人を知った。そして、美しい欠片の集合体を見た。
人の言葉で言うならば、「希望」のようなプリズムを。
アセイラムは大神殿の巫女だった。彼女の生まれ持った神性が塔の扉を開け放ち僕を壁から解き放ち、そして人の姿を教えた。
赤い燕尾服に黒革の長靴。彼女に色彩の少し似た髪と目と肌の造形。初めてこの姿を得て彼女を瞳に映した時、僕は涙というものを知った。

とても嬉しいのに、とても悲しい。とても寂しいのに、とても温かい。離れがたいのに手は触れず。壊れたいのに、まだ生きたい。理解のできない心の破片が、そうして溢れ出るのだと。

僕はアセイラム姫の武器。血も空も知らない生きた槍。

しかし、涙の温度は知っている。

「…スレイン？」

伊奈帆の声に右手と左手の中身が返事をした。

『撃ってください』

『早く切れ』

銃身は熱く切っ先は輝く。僕の武器たち。名はスレイン。でも違う。君たちと同じ名前だけれど、彼は。そう。

――――『嘘ついて、どうするんですか』

目の光度が。色の温度が。似ている。すごく。僕の最初のスレインに。

「…お前のそれは、武器か？」

赤い伯爵服のスレインの冷たい声が響いた。粉塵のさなか涼やかな立ち姿で、月光を浴びた姿は由緒ある王族のように威厳がある。白い頬を歪め、口角を吊り上げ彼は言う。
「醜悪な形だ」
そして形を変えた。青白い光が溢れる。その中で作り替わる人の組織と武器の素材。光の量と強さは強大過ぎて比べ物にならないが、この色は同じだ。いつだって姿を変える時に右手を入れた、美しく澄んだ光。もう今は記憶の中にしかいない、僕の。
僕のダガー。

――――『貴方は、武器をどう使いますか』

光が収まり現れたのは、黄金の長柄。鋭く細い両刃の穂先は透き通った泉のような翠緑。月光に透ける刃の色は、知っているよりずっと鮮やかに濃い碧。
『伊奈帆、撃て！』
『…来る！』
槍の使用者はここにはいない。しかし槍は自ら向きを変え、風を切り竜巻を起こし通り過ぎた。気付いた時には、腕から血が噴き出していた。ガシャ、ガシャン、と床に落ちる金属の音。銃が落とされ破壊された。
「生きながらにして力を失った武器か。哀れだな」

背後に声。と同時に風とうねる音。刹那の金属音。地面を抉る足。眼前で火花を散らす二つの刃。今度は槍を受け止めた。
『…お前、壊すぞ』
曲刀の言葉に槍が笑った。
「馬鹿な武器だ」
パキン、と嫌な音がした。衝撃で肩から地面に叩きつけられる。
「壊れた方が幸せだ。そんなの」
手の届かない所に、僕の血で汚れて転がった二つの武器。裂かれて、折れて。手の中には刃を失った鍔と火薬の臭いだけ。僕を見下ろしもう一つの武器が笑う。
「何でそんなの、持ってるんだ？」
憎めたらいいのに。この翠玉の刀身を。

二振りだったのだ。スレインは。

僕のダガー。灰色の服で、言葉遣いの割に言うことが辛辣で。プルワークに凭れ隣で盗み見た瞳が視線に気付き笑みを浮かべた。もういない。壊れた。

僕が十八の時。短剣のスレインと出会って二年。彼の刀身はもはや透明に近かった。雲を背景に日に透かして、ようやく青味が分かるくらい。言葉もめっきり減って、人の形でいる事が多くなった。武器でいるより人でいる方が楽らしいと、初めて知った。

僕の船はその頃には結構有名で。生死に忙しい日々を過ごしていた。スレインを使うことは無くなった。戦闘中、懐に忍ばせてはいたが護身は自分よりスレインへの意味合いが強かった。人の形で船に置いておくことは危なっかしくてできなかったから。

間違えたのは僕だ。僕はスレインを武器だと言いながら傍に置き、その癖、彼を武器だと思えなくなっていたから。振るえば良かった。刺せば良かった。いっそ、僕が壊してしまえば良かったんだ。

あの日、銃弾が腹に撃ち込まれた。弾丸はスレインを砕き、僕の肉体には傷一つ付けなかった。

『…良かった、無事で』

全てが終わった後、僕はスレインを腰布の鞘から慎重に取り出し並べた。刀身は割れて砕けて、この姿でも発していた人肌の温度は無かった。言葉も無かった。光もなかった。どんな生命の残り香も無かった。僕はスレインを連れて船を降りた。彼を直すために。彼に会うために。

砕けた欠片を二つに分けて、僕の生命の一部を溶かしこんでできたのが銃とサーベル。
その時、僕は左目を失った。

「…僕の武器だ」
また衝撃波。体勢を崩した僕はあっけなく吹っ飛ばされて瓦礫に背を止められた。
「そんな浅ましい武器を携えて、よくこの場所に足を踏み入れられたものだ」
神々しい聖槍が地響きを立てる。すごい力だ。切っ先は燃え立つ氷の輝きで僕を見据えている。
「彼らは、君と同じだ」
スレインと同じ。

同じ刀身。スレインの原石の大部分は、このランスに使われたのだ。残り屑で、刀工が気まぐれに作った出来損ないがあのダガー。古城で使い捨てられ、時と眠っていた美しい短剣。初めて会った十六の時。瞼を開いた瞬間の虹彩は星を宿して輝いて、僕を映して戸惑ったように見開かれた。そして聞かれた。低くて少し掠れた声に。それに僕は。
『相棒かな』

ダガーは一呼吸の後、儚く笑って立ち上がった。差し出された白い手を握った。

「君と同じ武器がいた」

槍がおそらく怒りのために震え、周囲の粉塵は突風に巻き上げられ天に昇った。使い手を必要としない武器。それはもう人の使いうる武器ではない。

武器そのものが神だ。戦神。

「同じ色で、同じ顔で…同じ、声で。背丈と服は違うけれど。僕は覚えてる」

僕のダガー。僕の相棒。もうどこにもいない。

槍の切っ先を間一髪避けきれたのは、彼が言葉尻を待たず一直線に飛んできたからだ。人の話をよく聞かないのと、すぐ頭に血が上る悪癖。僕は誰より知っている。

「でも、もういない。透明になって砕けて壊れて、その欠片を集めて出来たのが僕の銃とサーベルだ」

床に転がる壊れた僕の武器たち。代替の利く、ただの火器と刃物そのもの。ダガー、そしてランスのような人知を超える力は何もない。

ダガーの抜け殻に溶け込んだのは僕の目が見たもの。僕の命に滲んだもの。武器に心が宿り、彼らはスレインの姿で僕に引鉄と切っ先を委ねた。僕は容赦なく彼らを使った。時に限界を超え、直して継ぎ足し交換して。彼らの身体は、今では傷のない場所を見つ

ける方が難しい。でも僕も銃もサーベルもそれでいい。それで笑える。いつだって僕らは、血に塗れた身体を。焦げ臭い身体を、人間の身体を寄せ合って。傷だらけになりながら空に向かって笑うんだ。

槍の切っ先が風を呼ぶ。髪が逆立ち目が霞む。

もうたくさんだ。あんなのはごめんだ。僕の身代わりに死ぬなんて。武器として使われず破壊されるなんて。壊れるのなら、誰かではなく僕の手で。命ある武器に約束された特別な力など無くとも、継ぎ接ぎだらけの壊れかけでも。いつか壊れるその日まで、返り血を受け最後まで命を燃やしてほしいんだ。

スレインは武器なのだから。

「君の使い手は、もういないよ」

「知っている」

即答だった。槍がまた飛んでくる。限りなく完璧な直線を描いて。僕はこの槍を壊すことはできないけれど、全ての攻撃を避けることができる。彼はスレインだから。

「どうして扉を開けた。なぜ僕の鎖を解いた。頼んでもいないのに空を見せた」

槍がビュンビュン唸りを上げ円を描き飛行し矢継ぎ早に問う。僕は軌道と彼の形状のもたらす次の、その次の動きを脳内で可能な限り展開する。

槍の周回する速度はみるみる上がる。軌道は単純になる。切っ先は月光と怒りに輝い

ている。
地面を蹴った。
死の渦の中に飛び込み手を伸ばす。
血飛沫。
激痛。
床の衝撃。
止まる音。
月の光はこの手の中に。
「迎えにきた。スレイン」
怒りに輝く美しい槍の柄は、短剣と同じ温度だった。

グングニル

空の向こうには、何があるのだろうか。

夕焼けの向こうには、夜の孤独か。星空の向こうには、遠く輝く追憶か。抜けるような青空の向こうには、忘れ得ぬあの瞳と美しい生命の色彩か。そして。

朝焼けの向こうには、何が見えるのだろう。

「僕はお前のものじゃない」

そりゃそうだ。と伊奈帆は自分を射殺すような視線を送る双眸を見下ろした。刃の色に等しい碧翠の眼（まなこ）。

「お前。何か勘違いをしていないか」

声は平静を装いきれていない。低く甘い声はやはり怒気を含んでいる。スレインは踵を鳴らし距離を詰めて伊奈帆の前に立ちはだかった。

「僕はお前が嫌いだ」

そうだろう。こいつはいつも怒っている。
「僕が嫌いでもいいけれど」
夕暮れの終焉に、一番星が瞬く。赤く照らされ燃えるようだった深紅の服は空の色を吸い黒く色を変えてゆく。
この言い合いは何度目になるのだろうか。
「手入れしないと、錆びつくよ」
槍が本性のスレインは、ぎり、と奥歯を噛み締めた。

銃とサーベルを失って三ヶ月。彼らの破片は、集められるだけ集めてきた。真っ二つの身体の断面はただの鉄でしかなく、ポンメルと銃床に埋め込んだ欠片は完全に透明だった。ダガーも、銃も、サーベルも。僕のスレインは本当に壊れてしまった。
森に飲み込まれた廃墟の塔で手に掴んだ槍。彼と共に、今僕は船で移動している。連れてきた、というより引きずり出した体で女神の聖槍を盗んだ。天罰が下るかもしれないが、仕方がない。僕は海賊だから、欲しいものは必ず手に入れる。
彼の使用者は何百年も前に死んだ。神聖な巫女とはいえ、生身の身体を持つ人間ならば仕方のないことだ。僕がスレインの存在を知ったのは、御伽噺からだった。その地に語り継がれた、聖女の聖槍の話。

「僕は、お前の武器ではない」
「知ってるよ」
聖女の武器だ。女神の武器だ。彼を手に取ることのできる人間は一人だけ。
「どうして、僕を連れてきた」
「気まぐれさ」
本当は、ずっと探していたんだ。
「何が目的だ」
「もう何回目？それ」
目的なんて特にない。強いて言うなら、そうだな。
「喧嘩したいんだ」
スレインが眉間に幾重にも皺をよせた。
「馬鹿か」
「馬鹿でいいさ」
美しい槍だ。ずっと置いておかれて、古びて汚れてはいるが。刀身の輝きはおそらく、女神の手にある当時から変わらない。濃く光る刃は透き通った泉のような翠緑。
雲を呼び、雨を呼び、恵みを与える聖なる武具。聖女の祈りと演舞を天に届ける世界で唯一の武器の姿の神の存在。人に作られた人を超える武器。それがこのスレイン。

「腹が減らなくても、年を取らなくても。綺麗にしないと壊れるよ」
槍が怒った。空気が震える。
「僕は壊れたいんだ」
「残念だけど、それは駄目」
問答無用で柄を押さえつけ、柱にロープで縛りつける。神具に罰当たり極まりない扱いだが、致し方ない。素直じゃないし、力じゃ敵わないから。
打粉をはたく。ちょっとつけすぎた。暴れるから。まあいいか。どうせ拭くし。
「お前、殺してやる」
「はいはい」
布で柄を拭き上げる。柄の細く繊細な彫刻の窪みも、爪を布で巻いて一筋一筋汚れを取る。真っ白だった絹に黒ずんだ汚れが細かい線の模様を描いた。いつの間にかスレインは静かになって動かない。仕事がやりやすくなった。目を近づけて、拭き残しのないよう丹念に絹を擦り付ける。
香油を薄く撫でつけると、刀身が身震いした。寝てたんじゃないか、こいつ。でも確かにちょっと冷たかったかも、と手のひらで温めてゆっくり伸ばす。柄は星明りを繊細に照り返し、刀身は月光をその中に閉じ込めた。透けた空色の中で乱反射する白色は夢のように美しかった。
――――『手つきが、なんかいやらしい』

脳裏に懐かしい一言、くすりと声が漏れた。大事に磨いて、砥いで、鞘に仕舞って懐に抱いた。日に日に口数が少なくなって、どんどん笑顔が悲しく映って、握った手は握り返すこともできなくて。そして死んだ。懐に抱いて、鞘の中で、銃弾を身に受け彼の刀身は粉々になった。僕を庇って。僕を救って。盾ではない。鎧ではない。武器なのに。

――――『僕は武器なんだ』

血を吸い、刀身を煌々と輝かせたダガーの叫びを、願いを、魂を、僕は損ないもう二度と取り返すことはできないんだ。

今この手にある武器は槍だ。僕のダガーではない。彼は、鳥籠の花畑も爪月の夜海も二人の僕のことも知らない。そして、彼しか知らない世界がある。人がいる。愛がある。後悔がある。そして、怒りと絶望、世界に対する焦がれて止まぬ憧れも。

僕は、彼をどうしたい？

「…終わったよ」

気付くと、もう夜更けだ。

ぶわ、と空気が膨らんだ。輝かしい青く白い光。流星が地に落ちた瞬間のような神聖

な光だ。
「…眠い」
開口一番がそれ。スレインは脱力した姿勢で柱に背を預け、ぱち、ぱち。と重そうな瞬きを繰り返した。視線にいつもの険はない。
「時間がかかった。もう寝ようか」
ベッドへ促すと、スレインは素直にそこへ体を横たえた。途端の寝息。本当に眠かったらしい。
脇に腰を下ろし、夜に包まれた槍の横顔を見下ろした。怒りも悲しみも感じさせない、静かで彫像めいた安らかな寝顔。
「…同じ寝顔だって言ったら、怒るかな」
夜半に目を覚ましては、眠るダガーを見ていたものだ。

レーヴァテイン

「ねえスレイン」
耳に馴染んだ声は、少し先から聞こえてきた。瑞々しい空気の中花を分け、足を進める。
「何でございましょう」
彼女は振り向き微笑んだ。僕はこの笑顔を見るといつも泣きたい心地になる。彼女は涙を流すかわりに笑っているのが分かるから。死を憧憬しながらも生を手放せない孤独が分かるから。
「空とは、どんな色なのでしょう」
見えると思って顔を上げたわけではない。高すぎる天井にはステンドグラス。寒々しい玄武岩の城壁。広い円庭には、光を浴びずとも咲き乱れる花々。悪趣味な鳥籠の中、僕は美しい言葉を探す。
「きっと、今まで見たどんなものよりも綺麗な色をしています」
彼女は肩口の髪を揺らしてくすりと笑った。今度の笑顔は明るく優しい。良かった。
「貴方らしいわ」

主人の隣に跪き、足元の花を一輪手折る。
「もう、お部屋に戻りましょう」
彼女は花を受け取り目を閉じた。深い呼吸。
「そうね」
車椅子の背を押す。車輪に押しつぶされた花と茎と葉の命の残り香を吸い込む。死の匂い。生の匂い。僕には半分あって、半分ないもの。半分は生死を内包し、もう半分は永久に変わらぬこの身体。人間の真似事など、道具には必要のないことなのに。
「スレイン。眠るまで、手を握っていてくださいますか？」
それでも。僕の人の姿を必要としてくれる人がいるのなら。
「喜んで。今日は、何の話をしましょうか」
武器としての本能など、僕の身勝手な願いなど。取るに足らないことなのだ。

『貴方は、武器をどう使いますか』

…Continued to "his dagger"

美しい武器

朝焼けの海を何度見ただろう。
群青から赤色へと変わる空の色。灰色ではない雲の影。闇夜に染まっていた海は紺碧へ。鳥の影が雲を越え、光が波に踊る様。
僕がそれらに目を奪われて、ふと気がつくといつも隣にお前がいた。お前は空など見ていない。目が合うからそれが分かる。
僕を見ているふりをして、お前は僕を通して知らない何かを見ていたのを知っている。

「…お前、死ぬのか」
「人間だからね。いつかは死ぬさ」
丸い船窓からの唯一の光で、室内の色味はグレーに統一されている。もう何日も部屋に籠って、空をまともに見ていない。その理由の全てである、船長室の寝台を見下ろしスレインは顔を顰めて口を開いた。
「…僕は、お前が嫌いだ」

横たわる腐れ縁の海賊は、はは、と愉快そうに笑った。
「知ってるよ。何年、一緒にいると思ってるのさ」
その顔の皮膚に無数に寄った皺を見て、いつの間に、こいつはこんなに年を取ってしまったのだろうと武器は今更考える。瞼を閉じて浮かぶのは、初めて会った時の、子どものような幼顔だ。肌は若く、豊かな髪を左に流し丸みの残った頬と、口以上にものを言う、オレンジ色の大きな眼。あどけない造形とは裏腹の、瞳の温度の冷たさ、そして苛烈さが鮮烈だった。
罰あたりにも神への供物聖槍を盗み出した人間。怖いもの知らずの若造も、今では一人の死に損ないの老船長だ。
人間は死ぬ。武器を残して。
「…頼んでもいないのに、勝手に連れ出して」
僕を掴んだお前の手。あの力の強さと血の熱さ。
「こんなところまで連れてきて」
夕焼けしか知らない僕に、お前は星を、月を、海を、朝焼けに染まる世界を教え。
「そして、お前は死ぬと言う」
僕を残して。
僕を所有したのはお前で二人目。お前を知らなければ、僕はずっとただ一人のものだった。彼女が死んで、僕はそれを知っていた。それでよかった。長い、長い時間が経てば、

壊れていくことができたろう。あの方のところへ行けると何の疑いもなく愚かに信じ、全てを終わらせられただろう。

壊れることを忘れるほどの長い時間を過ごした僕に空を見せ、そして幾年もお前とともに在るうちに、お前は僕をすっかり変えてしまった・

血に塗れた刃。乙女の加護も、聖なる力も失われた。一人の海賊の所有する、彼の命を守るための武器となってしまった。

「お前は人で、僕は武器で、お前は僕を残して死んでしまう」

僕はお前ではない誰かに所有され、人を殺し、今とすっかり変わってしまうのだろうか。

「お前は僕に空を見せるべきではなかった」

空を知りさえしなければ、世界を知ることは無かったろう。血を知ることも無かったろう。人を知りさえしなかったろう。

「それは違うよ」

伊奈帆の手がスレインの手首を強く掴んだ。節くれだった、皮の薄い、年老いた男の手。弱々しい見てくれから、想像できない強い力だった。

「君には、空が似合うよ」

そうして笑った。皺の間に笑窪が浮かんで、少年のように歯を見せて。
潮の匂いに病の香りが混じり合う船室。日が高くなり、窓から射し込む光は無遠慮に、年月と人と人あらざる者の姿を暴く。
人の手は、力強く武器の手を握り続けている。
「僕は、君を壊すことはできない。君を壊せるのもなんて、世界中のどこにもないんだ。知ってたろう？」
聖女の聖槍。神の槍。唯一無二の神具を壊せる武器なんて、世界の何処にもあるはしない。
「知っていた」
返答は簡潔だった。伊奈帆は握った武器の手から力が抜け、彼の吐息が深くなるのを感じ取る。
「僕は何度か、人の形をした君を壊す気になったことがあるよ」
寝姿を見下ろし、無防備な首元に手を掛けた事が何度もあった。
「でも、無理だった」
伊奈帆は病と老いにより落ち窪んだ隻眼を深く瞑り、握る手に一層の力が籠った。
「…だから、君を武器として使うことに決めた。僕なりに、君を大事にしたつもりだ」
今よりずっと若く、そして誰よりも強かった彼が振るう槍の名。いつしか、海賊の間では軍神の槍を意味するグングニルと呼ばれるようになっていた。

それも、もう昔の話だ。
「…大きなお世話だ」
スレインはやっとの思いでそれだけ言った。伊奈帆の顔を見ると、彼の右目が一心に向けられていると気付き、スレインは自分の右の手首を握った彼の老いた手を左手で包む。乾いているのに汗ばんで、人とは思えぬ温度の手。
伊奈帆がスレインを見つめたまま、静かに口を開いた。
「…一つお願いがあるんだ。聞いてくれるかな」
吐息に交じって聞きづらい。スレインは屈んで耳を寄せた。
「…何だ？」
視界いっぱいが彼の顔。彼の口。彼の鼻。彼の左と右の瞼。こんなに顔が近いのは、初めて出会った時以来かもしれない。年恰好と武器の形が異なる二つの自分を破壊したあの時。同じ顔で、一人の男に飼い慣らされる自分の姿が我慢ならなかった。
どんな因果か、今では僕がその男の武器。身を賭してこいつを守ったあいつらの気持ちも、少しは分からなくはない。
その男が、もう死ぬ。憎いばかりの男だが、憎いだけではなかった。それが今、たまらなく辛い
伊奈帆が頭を動かして、額と額がコン、と当たった。

「…また、会おう」

そうして、思いもよらないことを言う。鼻先に感じる呼吸の温度に、鼻の奥がツンとする。

「お前は死ぬのに？」

声が震えた。お前は死ぬのに。死んでしまうのに。

「もう二度と会えない。死ぬというのは、そういうことだ」

死んだら、もう直らない。武器も同じ。少しの傷なら直せるが、完全に壊れたら、もう二度と戻らない。人間と同じだ。武器と同じだ。

僕はお前の武器として、戦いのうちお前の命を守ることはできた。そして今、死にゆくお前の手を握ることしかできない。武器から命を守れても、時間からは守ることはできない。そんな当たり前のことに、今頃ようやく気付くなんて。

伊奈帆が大きく目を見開く。虹彩の模様が星のように美しく煌く。

「そうかもしれない。けれど、記憶は。思い出は残る」

右目の色に映り込んだ僕の顔は、とても武器とは言えないだろう。

伊奈帆が視線を動かした。その先を追うと、窓枠で丸く切り取られた空が見える。

「僕は君と空を見て、失った武器たちが傍にいるように思えた。君にも、そうであってほしい」

それきり口を利かなくなった。スレインは、彼の額の温度が徐々に下がり、自分と同じになってから、のろのろと体を起こし船室を出た。
そして、歴戦の海賊に恐れられた軍神の槍は、刀身と同じ色の淡い金髪に風を受け、空を仰いでこう言った。
「お前の右の瞳のような、オレンジ色の夕焼けだ」

武器の所有と使用に関する一海賊の書留について

武器とは、使用者の身を守る道具だ。だから、僕は僕の武器で人を殺し、獣を殺し、海を割り雨を降らせ世界の理を破壊した。自分が生き延びるためにね。それは間違っているのかもしれないし、そうではないのかもしれない。正しさなんてものは、結局のところそんなものだ。正論も正義も正当性も、既に取り返しのつかなくなった事柄を覆すことはできないのだ。

これは遺書だ。しかし、読み手を想定していない。いるとも思えないから。しかし、万が一にもこの海が続く先に僕ら以外の意思が命があるならば、一個人の妄想に過ぎないかもしれない現在の弁明と、僕の意識が消失した後の彼の処遇について語ることを許してほしい。

彼。僕の武器についてのささやかな願いと祈りを、どうか知ってほしい。

僕の武器の名前はスレイン。形状は槍だ。武器に名前を付けるなんて、変わったやつだと思うかもしれない。しかし、これは大切なことだ。なぜなら、スレインは生きているのだから。生ける刃。女神の聖槍。海賊の武器。それが彼。

スレイン。

こうして文字にすると、良い名だと改めて思う。響きも良く、僕はこの名を呼ぶのが好きだった。もう、声を出す機能が僕には失われてしまった。それはとても残念だ。もう一度くらい。月夜の寝しなに、彼の名を呼んであげたかったと思う。昼間はどうしても喧嘩になってしまうから、やはり夜がいい。夜が彼の住処なんだ。

スレインは廃墟で眠る聖槍だった。彼は古の武器であり、一人の巫女の神具として生を受けた。そして、夜と雨しか知らぬまま、彼の持ち主は死に神殿は草木に覆われ戒めの鎖は錆びることなくスレインを留め置いた。そして彼は、たった一人で朝をも知らずそこにいた。

僕はスレインを盗んだ。海賊だからね。仕事をしたわけだ。大層骨の折れる仕事だった。スレインを盗み出すのに払った代償は二つ。

銃とサーベル。

海賊の武器としては、槍よりよほどしっくりくるだろう。手に馴染む武器たちだった。自分の一部のように。それは当然で、僕の一部が彼らに生命を与えたからだ。彼らの名前もスレインという。右手に銃を。左手にサーベルを。同じ名前だけれど、彼らは絶対に聞き間違えたりしない。それを語るには、もう一人のスレインの話をしなければいけないな。

僕の初めての盗みは、ダガー。短剣だった。これは海賊になる前のことだから、まあ、あんまり褒められたことではないのかな。僕が十六歳の時。…ああ、もうそんなに経つ

のか。廃城に忍び込んだのは、隠れ家に、そして金目のものを、と思ったからだ。僕は空腹で、傷だらけで、そして疲れていた。苦労話はやめておこう。とにかく、命からがら逃げ込んだのは石造りの尖塔も高い黒の古城。食べ物の期待はしていなかったけれど、林檎が木に生っていた。僕は林檎を齧り、蜘蛛の巣の張る正門から寝床を求めて足を踏み入れた。

埃すら月明かりに美しかった。壁は月明かりに青く染まり窓の輝すら影を彩る。音はないのに旋律の聞こえるような城内を、僕は厳かな心地でゆっくり進んだ。色あせた毛氈の敷かれた階段を上り、シャンデリアのガラス細工の精巧さに息を詰め、高い場所へと足が勝手に体を運んだ。塔の階段は弧を描き、触れた壁は冷たく硬い。

尖塔の内部。天井に見えたのは床。

揺れることなく時を止めた鳥籠がそこにあった。とても大きい。近くまできて見ると天井から不思議な色味の細い鎖で吊るされていて、ドーム型の格子の内には驚くべきことに花が咲き乱れていた。花畑だ。花の種類など知らないが、白い花々は裾を広げた少女のように可憐だった。階段からは蔓のような架け橋があり、僕は鳥籠の開きっぱなしの出口から中に入る。花の香りは甘く、草の香りは少し苦い。太陽の光も月の光も届かない、この城でもっとも高い場所に在る檻の中。人が十人も大の字に寝転ぶことのできる花に覆われた鋼鉄の床の上。

そこに、一振りの抜き身の短剣があった。柄の宝玉が蛍のように発光し、刀身は月光

なくとも冴え冴えと碧く美しい。手に取ると、あたたかい。そして、鼓動が掌を伝わった。生きているんだ。

息を呑む刹那、ダガーは眩く光り僕は思わず取り落とす。膨大な光が収まると、そこに人が立っていた。淡く青い光に包まれて、仕立ての上品な灰色の軍服を纏い、月光色の頭髪を揺らし碧玉の双眸を煌かせ。

「貴方は、武器をどう使いますか」

ダガーのスレインは、低く柔い少年の声でそう問うた。

「相棒かな」

僕は答えた。スレインは目をまん丸にして、そして笑った。握手のために差し出された彼の手を僕は握った。

僕は彼を盗んだ。誰かの持ち物であったらしい彼を。廃墟の城の鳥籠で花に埋もれて転がっていた彼を。人の姿ではなく、武器の姿で。右手に柄を握り締め。その短剣で、生きた武器で、僕は初めて人を殺した。首を切った相手は血が噴水のように吹き出して、髪も服もぐしゃぐしゃになった。熱い血の温度に、僕は生死が反転するような錯覚に陥った。八人。追って来ていた。捕まるわけにはいかなかった。後悔はないが震えの止まぬ手の中に、スレインがいた。彼の刃は血を滴らせ、彼の柄は僕の手と一緒で血塗れだっ

た。その柄も震えた。刀身も震えた。しかしそれは、僕とは違う理由で、だ。

『僕は武器だ』

殺戮の歓喜に震えていたのだ。肉を裂き、血を浴びて、恍惚を含ませた声で彼は叫んだ。僕は武器だ、と。

死体の転がる森の中、輝く短剣は僕に聞いた。

『無事ですか』

持ち主を、所有者の命を守ること。それが武器の宿命であり、本能であり、そして願いだ。いつしか震えは止まっていた。僕は手の中のダガーが、人の姿ならば今どんな顔をしているのだろうと想像した。

『相棒ですから。人間の寿命は短いですが、せいぜい長生きしてください』

赤く染まった服の裾で刀身を拭い、僕は彼と森を抜けた。海に出て、僕は世界を知った。夜の星に夕焼けの雲。真昼の月に朝焼けの水平線。瞳に映した百億千億の空の色。でも、今思い出すのは、スレインと見た爪月の夜空だ。命を削り、武器としての力を失いかけていた彼の刀身に透ける月光だ。僕は彼を武器として使うと誓ったのに、武器として使わず彼を破壊されてしまった。せめて、武器として。この手の中で壊れていれば。

話が逸れたな。

僕はスレインに守られた。生かされた。そして、彼を失った今もこうして生を繋いでいる。まさに、彼の言った寿命を全うしようとしているわけだ。そこで、一つ心残りなことができた。

ここに、一振りの槍がある。ダガーを失い、銃とサーベルを失った僕の最後の武器。女神から盗み取った聖槍であるスレインのこと。

彼はダガーと同じ。短剣と槍は、同じ一つの生命を二つに分かたれて生まれた武器だ。まず槍が生まれ、その残り屑でダガーが生まれた。彼らは同じ一つのものでありながら、決定的に異なっている。それは、武器としての在り方が。道具としての誇りが。生あるものとしての宿命が。

聖槍は武器であって武器ではない。神たる槍は血も持ち主も争いも必要としないのだ。スレインは、僕がいなくなったら本当に一人きりになってしまう。彼は神槍だ。そして、彼自身が戦神だ。使用者を必要としない孤独な武器。守るものを持たない彼は、唯一守りたかったものを守ることができず、そしてずっと苦しんでいる。僕は彼を武器として使い、生きた。スレインは、そのことに始めは反発していたが、次第に武器として肉を裂き骨を砕き血の雨を降らせることについて彼なりに得心したようだった。こんなに長い付き合いになるとは知らなかった。喧嘩ばかりだったけれど、それも今はでは思い返すと楽しい。もっと喧嘩もしたかったし、声が出る間に伝えておきたいこともあった。後悔先に立たず、だな。

また話が逸れた。つい感傷的になってしまう。これだから年寄りはいけない。つまり今僕は、彼を所有した責任を放棄して死ぬことに葛藤しているわけなんだ。

美しい槍だ。悲しい槍だ。そして、強い心を持った槍だ。槍の刀身は血を浴びてなお美しい。それは、彼が決して自分のために戦うことがないからだ。僕の為に朝日の中で血に染まり、彼の女神のために鎖に繋がれ闇に溶ける。彼にとって、自分が汚れるとか、壊れるとか、そういうことはどうでもいいんだ。ただ、願いと祈りに刀身を捧げ切っ先を委ねる。武器であるのに、所有されることすら許されず、主を失い彼が数えた幾万の夜を思う。

僕が盗んだ。僕の武器だ。そして、僕はもうすぐいなくなる。だから、誰かに聞いてほしい。知ってほしい。たまらない気持ちになる。僕は、ダガーのスレインを失い聖槍のスレインのことを知ってから、ずっと彼を探していた。

槍は武器だ。聖なる槍は天災を操り、戦場のランスは人を殺した。巫女の神具だから。海賊の武器だから。でも、もういいんだ。武器でなくてもいいんだ。スレインは、武器であることをやめてもいいんだ。だから、僕は心残りだ。せめて、自分の口から言いたかった。生きろ、って。僕が死んでも生きてって。そして、君がいたから生きられたって、楽しかったって。

好きだ、って。言ってやれば良かった。どうしてそんな簡単なことをしなかったんだろう。まだ未来が途方もなくあるうちに。口喧嘩も、ちょっとした悪ふざけも、たまに

見せる茶目っ気も、今となっては奇跡のようにそこにあったと思い知る。
スレイン。
お願いだ。どうか、壊れないで。そして、どこへなりとも行ってくれ。僕らが行ったことのない場所へ、君のまだ知らないどこかへ。君は、どこへだっていけるんだ。檻は無い。鎖は無い。約束すらない。それでも君は行ける。だって、君は生きているのだから。
スレイン。君は僕の武器だった。でも僕はただ、君の大切な人になりたかっただけなんだ。強引だったかもしれない。無理を強いたかもしれない。でも、ダガーの分身とも言える君を、僕は君として好きだった。どうにかして伝えられたら良かったんだけど、もうそれもできない。
死ぬのが怖いのは初めてだ。いつだって、怒りはあっても恐怖はなかった。でも、今は怖い。この、伝えることもできなかった君への想いが跡形もなく消えてしまう事が。君の事を、僕は大事にできたろうか。僕は君に、言えない事がたくさんあった。ダガーを愛していた。左目を失った。ダガーの魂を受け継いた銃とサーベル。彼らの傷跡だけの素肌の愛おしさ。そして君。銃とサーベルを壊した君。しかし、憎むことなどできはしなかった。血を流しながら君を求めた。君の輝きはダガーと同じだったから。ダガーと同じ顔で眠る君の事が好きだった。そして、ダガーとは違いいつまでも僕を拒む君が大切だった。決して、失いたくなかった。折れてほしくなかった。欠けてほしくなかっ

た。汚れても拭いてやる。傷がついたら磨いてやる。人など殺したくはないと言ったら、僕は君を手放しただろう。でも、君はずっと僕の手の中にあり切っ先を僕に委ね、僕の命を救ってくれた。おかげ様で、何とかここまで生きられた。ありがとう。

目が痛い。もう、よく見えない。

心を残していけるなら、君の光を追っていく。だからどうか、生み出されたこと、今生きていることに絶望しないで。ダガーは死んだ。銃もサーベルも、もういない。しかし、君は生きている。生きているんだ。僕が見られなかった空を、これからは君が見て欲しい。朝焼けに染まる君の横顔が、僕は何より好きだった。

これで全部だ。僕の槍。僕の武器。とても優しい大馬鹿野郎のスレインへ。

誰かに知ってほしい。

美しい武器があったこと。

美しい人がいたこと。

僕は、彼とともに生きたこと。

彼を残して死ぬことを。

——inaho

波に砂がさざめき風に潮が香る。
少年は文章を読み終え、筆記体のサインに片眉を上げた。
「伊奈帆？」
振り向く。怪訝そうな表情で近づいてくるのは、夏休みで帰省中の隣人だ。彼の素足には砂が張り付き、半袖の綿シャツから伸びた腕は雪面のように太陽光を反射して白く光った。
「スレイン」
伊奈帆は持っているものを顔の高さに掲げた。風を受け古い手紙がしなりはためく。
「これ。拾った」
「何です？瓶？」
スレインは伊奈帆の左右の手に視線を一往復させた。
「ボトルメール。変わった紙だ。羊皮紙ってやつかな」
「今時、古風ですね」
「それでさ。変なんだ」
「何がです？」
衒いなく見つめられ鼓動が跳ね上がる。北欧人らしい色彩の彼の中で、特に目を惹く美しい瞳の虹彩の色。その輝き。

まるで宝石のよう。そして、人ではないようだ。
伊奈帆は気を取り直して手紙のサインを指差した。
「ほら、僕の名前と同じ」
勢いに任せた筆記体は、Inaho—イナホだ。
「スレイン」
手紙に影響されて、名前を呼んで音を舌で転がしてみる。確かに、綺麗な響きの名前かもしれない。
スレインは静かな表情で見下ろしている。彼の方が、少しだけれど背が高い。一歳しか年が変わらないはずだけれど、不思議とすごく年上のような錯覚に襲われた。手紙のせいだ。自分はこんなに影響されやすい人格だったろうか。
「何度も何度も、君の名前が出てくるよ」
スレインが武器だって話。夏の終わりの寂れた海で、砂に埋もれたメッセージ・ボトル。しかも内容は、荒唐無稽なファンタジー小説の一篇だ。しかしなぜ、僕らの名前と同じだろうか。偶然にしては気味が悪いし、誰かの悪戯にしても理由が全く分からない。
今日ここに来たのは全く予定外だったのだ。たまたま何も用事が無くて、アイスでも買おうとコンビニに行ったらスレインも買い物に来ていて、どういう話の流れか海に行くことになったのだ。近場の、海水浴場でも何でもない、綺麗でもない海辺。歩いて一時間と少し。手荷物は財布だけ。ゴミや海藻、木片が散乱する海辺を歩き、そうして拾っ

たこのボトル。
　変な手紙だった。
「どんな内容でしたか？」
　スレインが聞いた。手紙を彼に差し出してみたが、微笑むばかりで読む気は全くないらしい。
　どんな内容、と言われても。ありのままに話すと気味悪く思うかもしれないし、その労力は多大だ。内容か…。そうだな。要約すると。
「ラブレターかな」
　武器に恋をした老海賊の書留だ。
　好きなら好きって、言えばいいのに。手紙を海に流したところで、拾った相手は僕だから。不合理で非効率。理解に苦しむ行動だ。
「スレインの横顔が好きだってさ」
　スレインは一度ゆっくり目を閉じた。それを正面から見た僕は、手紙の主に夏の陽を受け微笑む彼はどう見えるだろうかと想像した。馬鹿な話だ。そんな想像に意味など無いのに。
「僕と、同じ名前ですね」
　スレインは「帰りましょうか」と左手の掌を上に向けた。小さい子どもに戻ったみたいで少し恥ずかしいと思ったけれど、僕は彼の右手に自分の左手を重ねた。しっとりと

汗で濡れた人の肌だ。小さい頃は、こうやって手を繋いで遊んだな。いつからだろう。一緒に遊ぶのに、理由を探すようになったのは。一緒にいても、言えないことはたくさんある。日常の先に訪れる未来をただ安穏に信じてる。また会える。今度言おう。そんな保証のない約束を言い訳にして。

あの海賊の気持ちが、少しは分かるような気もする。彼もきっと、自分と武器の今に夢中になって、未来が見えなくなっていたんだ。

「スレイン」

砂を踏んで、潮風を吸って、繋いだ手の影が揺れる。

「はい」

ちらりと見上げる。前を向いた横顔。視線に気づいて、小首が傾ぐ。

「スレインは、何色の空が好き？」

汽笛の空耳に、膨らむセイルの幻影が。そして。

「朝焼けの赤」

朝焼けに染まる横顔が瞼の裏に鮮やかに浮かびあがる。

「伊奈帆の瞳の色ですよ」

だから好き、と彼は言い、握る手は帰路へと引かれた。

『迎えに来た、スレイン』

僕を握ってそう言った、彼の声と手のことを、昨日のように思い出す。
夕暮れの街並みを歩く影法師。繋いだままの掌はすっかり馴染んで同じ温度になっている。同じ手なんだ。柔くて血も争いも知らないが、お前の手は僕を握ったあの日のようにあたたかい。時折盗み見る左顔の眼窩には、生まれついてそのままの眼球が収まり朝焼けの色を夕陽に染めて燃え立つように輝いた。
生まれ変わりなど、信じているわけではない。でも、この人間といると、お前といた時みたいに、生きているのも悪くないと思うんだ。

『喧嘩したいんだ』

あの天邪鬼。海に手紙を流すだなんて、似合わないことするなよな。瓶に詰めて、海に流して、わざわざ小言を言わなくたって。
「今日、カレーだって。うちに来ない？」
マートフォンから顔を上げて伊奈帆が言った。食事の用意された明るい家に、彼はこれから帰るのだ。家族がいて、飢えもなく、血の味も知らない。ここは、夢のような場

所だ。僕には家族はないけれど、今思うと、お前が家族であったと思う。お前の手の中が、僕の帰る場所だったから。
「行こうかな」
伊奈帆が頬を綻ばせた。あいつの笑顔によく似てる。
「じゃあさ、久し振りにチェスをしようよ」
この提案も、お前と同じ。お前はとても強かった。今隣を歩く彼は、打ち筋は似ているが優しすぎて詰めが甘い。それが、喜ばしいのに無性に寂しい気持ちになる。
「強くなりました？」
前回の戦局を思い返しそう言うと、彼は生意気そうに歯を見せた。
「子ども扱いしないでよ。今日は参ったって言わせてやるからさ」
こそばゆくって肩をすくめる。きっと僕は、こいつが結構好きなんだ。
「本気でいきますよ」
「当たり前」
夕焼けと朝焼けは、風が違う。朝焼けの風はどこかもの悲しい。そして、夕焼けの風は帰る場所を香らせる。繋いだ手はあたたかい。天を仰ぐと、雲間に一等星が瞬いた。伊奈帆。お前にも見せてやりたい。この美しい夕焼けを。
「イナホ」
「何？」

こちらを見るのは、人を殺したことのない、お前よりもあどけない夕焼け色の双眸だ。
二〇〇年先で、お前の小言を聞くとはな。
「…いや、何も」
僕は笑う。伊奈帆も笑った。二人笑って、電信柱で烏が鳴いた。
この通り、生きてるさ。お前の知らない空の下。お前の面影の手を引いて。

あとがき

この度は本を手に取っていただきありがとうございます。

ライフル、拳銃、人型兵器に刀に洋刀、ピストル、サーベル、槍に短剣（カバー裏にはショットガン）と、欲望の赴くままに武器スレインを妄想しました。もうほんと、すっごく楽しかったです！　しょっぱなの「孤児×武器」シリーズとラストの「Arms of a pirate」シリーズは特に思い入れが強くてPixivにも上げていたのですが、足りない部分を補って、形にできて良かったです。

これは余談ですが、書き下ろし「Deep Green」は、オートマタについて調べているときに目に付いたポーの「メルツェルの将棋指し」から連想して行き着いたチェス専用のスーパーコンピュー[deep blue]をもじりました。スレインの瞳は彼のルックスの中でも特に印象的な部位なので、割といい感じになったんじゃないの、と自分では思ってます。

私生活でちょっと色々あって、正直もう本を出すのは無理かもしれないと思っていたのですが、ツイッターやPixivなどで優しく接してもらって、何とか戻ってこられました。ありがとうございます。やっぱり書くのはやめられないし、本を作るのってめっちゃ楽しい！って改めて感じました。書きたいものはまだまだあるので、細々とではありま

すがこれからも伊奈スレで活動を続けていきたいなって思います。どうぞよろしくお願いします。

♫今回お世話になった作業用BGM♪
「アノミー」　amazarashiさん
「さよならごっこ」　amazarashiさん
「命にふさわしい」　amazarashiさん

四方山話にお付き合いいただきありがとうございました。次の本でも、お会いできますように。

鳴海

イリヤの豪雨に銃を撃て

発行　Scramble/鳴海
発行日　2020.9.13/ZERO の方舟13
印刷所　（株）しまや出版様

Mail　jjncg720@yahoo.co.jp
Twitter　@narumiblue
Pixiv ID　955950

本作は制作会社、関係者、及び関係団体とは一切関係ありません。
無断転載、ネットオークションへの出品などはお控えください。